令和４（2022）年度
大学入試センター研究開発部報告書
大学入試センター・シンポジウム 2022

Report2022-07

大学入学共通テストはどのように利用されているのか

令和 5（2023）年 3 月

独立行政法人 大学入試センター 研究開発部

大学入試センター研究開発部報告書
大学入試センター・シンポジウム 2022

大学入学共通テストは どのように利用されているのか

独立行政法人大学入試センターは、令和４年 11 月５日、「大学入試センター・シンポジウム 2022」をオンラインで開催した。本報告書は、同シンポジウムにおける講演、討論等を当センターの文責で採録したものである。

目　　次

■開会挨拶 …… **3**
山口 宏樹（大学入試センター理事長）

■趣旨説明

シンポジウムの趣旨と大学入学共通テストの概要 …… **5**
荒井 清佳（大学入試センター研究開発部准教授）

■研究報告

令和3年度入学者選抜における共通テストの利用実態 …… **12**
椎名 久美子（大学入試センター研究開発部教授）

■事例紹介

事例紹介1　長崎大学の共通テスト利用 …… **31**
吉村　宰（長崎大学教育開発推進機構アドミッションセンター教授）

事例紹介2　早稲田大学の入学者選抜制度改革における共通テストの位置付け …… **42**
沖　清豪（早稲田大学文学学術院教授・文学研究科長）

■指定討論

指定討論1 …… **52**
延沢 恵理子（山形県立東桜学館中学校・高等学校教諭）

指定討論2 …… **58**
大塚 雄作（国際医療福祉大学赤坂心理・医療福祉マネジメント学部教授）

■総合討論 …… **62**
司会 ／ 石岡 恒憲（大学入試センター研究開発部長）

総合司会 ／ 伊藤　圭（大学入試センター研究開発部准教授）

■ 開会挨拶

山口 宏樹（大学入試センター理事長）

大学入試センター理事長の山口です。本日は、土曜日にもかかわらず、全国各地の多くの方々にご参加いただき、大変ありがとうございます。大学入試センター・シンポジウム 2022 の開会にあたり、一言ごあいさつ申し上げます。

この大学入試センター主催のシンポジウムは、大学入試研究の成果等を社会に発信するとともに、それをベースとして議論し、理解を深めることを目的としています。これまで大学入学者選抜に係るその時々の時宜にかなったテーマで、年一回開催してきました。少しふり返れば、2014 年の「大学入試の日本的風土は変えられるか」に始まり、高大接続改革に関連したテーマが続いた後、一昨年の 2020 年には「センター試験をふり返る」、昨年の 2021 年には「COVID-19 の災禍と世界の大学入試」を取り上げています。

今年、2022 年は、30 年あまり続いた大学入試センター試験に代わって令和 3 年度入試より導入した大学入学共通テストが、大学で育成すべき人材像が多様化し、入試の枠組みが変化する中、各大学にどのように捉えられているかに焦点を当て、「大学入学共通テストはどのように利用されているのか」というテーマを設定しました。

各大学が大学入試センターと協力して実施する共通テストは、大学入学志願者の高校段階での基礎的な学習の達成程度の判定を主たる目的とし、大学が、それぞれの判断と創意工夫に基づき適切に用いることにより、大学教育を受けるにふさわしい能力・意欲・適性等を多面的・総合的に評価・判定することに資するものとして位置付けられます。

高大接続改革が進む中、各大学が実施する多様な試験との組合せにより、一般選抜、総合型選抜、学校推薦型選抜など、大学入学者の選抜方法そのものの個性化や多様化も進みつつあります。各大学は独自のビジョンや将来像の達成に向けて、ディプロマ、カリキュラム、アドミッションの 3 つのポリシーをより一層明確にしつつ、アドミッション・ポリシーにふさわしい入試を模索するなど、大変な努力をされておられるものと拝察します。

以上を念頭に、本日のシンポジウムでは、まず大学入試センターから、大学入学共通テストの概要についてご紹介した後、令和 3 年度大学入学共通テストの利用実態について、全利用大学を対象として昨年度行ったアンケート調査研究の成果を報告します。また、大学における共通テストの具体的な利用方法について、国立大学の事例として長崎大学より、私立大学の事例として早稲田大学より、それぞれご紹介いただきます。そして、高校現場の先生お一人と大学の研究者の先生お一人をお招きして指定討論を行っていただいた後、ご登壇いただいた先生全員による、様々な観点からの総合討論へとつなげていきます。

本日の大学入試センター・シンポジウムが、共通テストのより良い利用について考えるきっかけになるとともに、大学における入試設計に関し、アイデアを提供する機会になれば幸

いです。

なお、大学入学共通テストは、来年１月に行われる令和５年度試験で３回目となり、その特性が一層はっきりしていきます。また、令和７年度大学入学共通テストからは、「情報Ｉ」が加わるなど、新学習指導要領に対応した試験となります。その検討状況については、大学入試センターのホームページでも随時公表していますので、適宜ご参照ください。

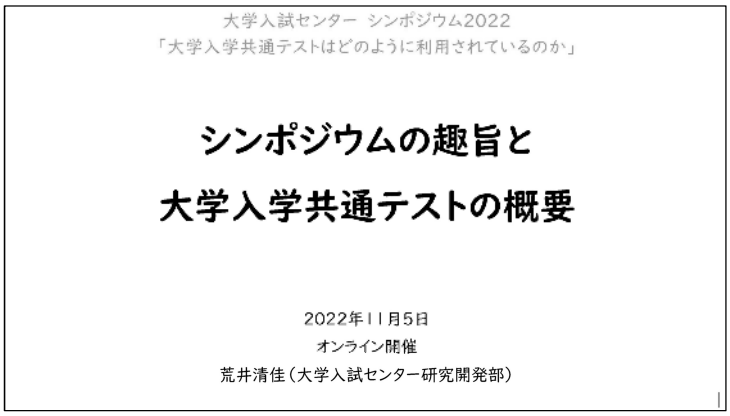
ウィズコロナの時代にあって、会議やイベントなど、対面による開催が徐々にその数を戻してきているところですが、本日のシンポジウムは昨年度に引き続き、オンライン開催とさせていただきました。参加しやすいというメリットはあるものの、情報が一方向になりがちな点がオンライン開催のデメリットの一つとして気になるところです。そこで今回も昨年同様、シンポジウム終了後に「情報交流セッション」を設けます。ご登壇の先生方と参加者の皆様方との意見交換や交流の場となればと考えておりますので、ぜひご参加いただければと思います。

最後になりましたが、ご多忙のところご登壇くださる先生方、ご参加いただく皆様方に厚く御礼申し上げますとともに、本シンポジウムが皆様にとって実り多い有意義な時間となることを祈念して、開催にあたっての私のご挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

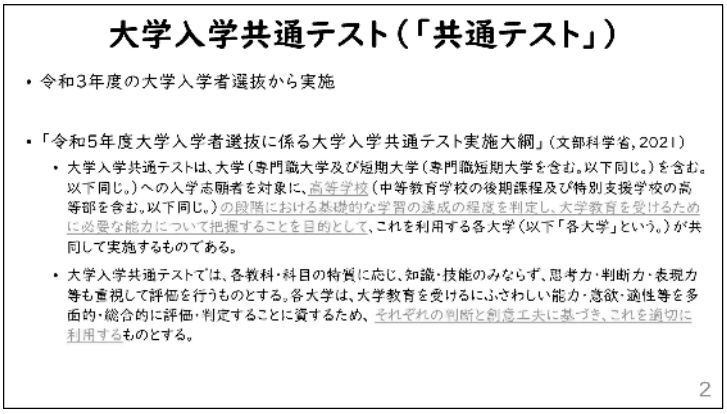
■ 趣旨説明

シンポジウムの趣旨と大学入学共通テストの概要

荒井 清佳（大学入試センター研究開発部准教授）



【荒井】　大学入試センター研究開発部の荒井清佳と申します。私からはシンポジウムの本体に入る前に、本シンポジウムの趣旨と、また、本シンポジウムで取り上げられます大学入学共通テストの概要をご報告いたします。どうぞよろしくお願いいたします。

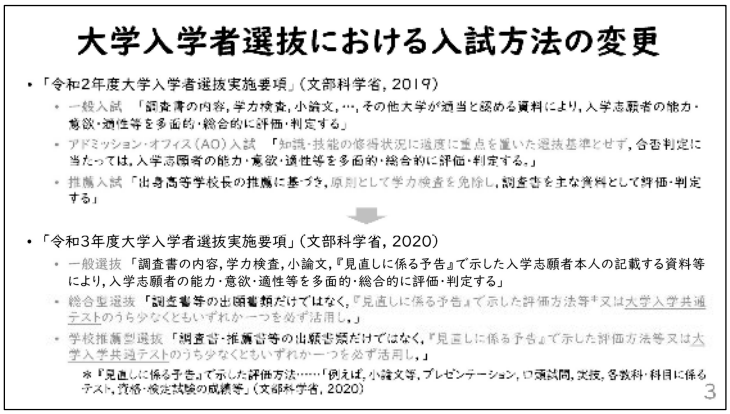


大学入学共通テストは、皆さまご存じのとおり、令和 3 年度の大学入学者選抜から実施されました。共通テストについては、「大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト実施大綱」というものが文部科学省から出されていまして、その中で実施に関して必要な基本的事項が定められています。こちらのスライドでは、その中から「第 1　実施の趣旨」の部分を抜粋してお示ししています。

初めに、共通テストの目的が書いてあります。1 つ目のポツの中ほどになりますが、「高

等学校の段階における基礎的な学習の達成の程度を判定し、大学教育を受けるために必要な能力について把握することを目的として、これを利用する各大学が共同して実施するものである」とあります。

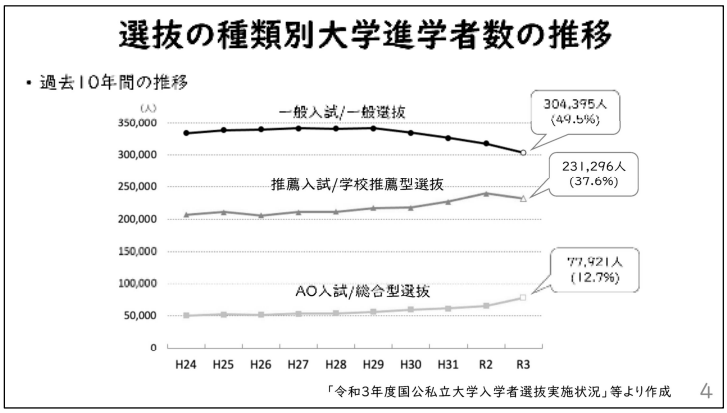
また、これに続きまして、「各大学は、大学教育を受けるにふさわしい能力・意欲・適性等を多面的・総合的に評価・判定することに資するため、それぞれの判断と創意工夫に基づき、これを適切に利用するものとする」とされています。



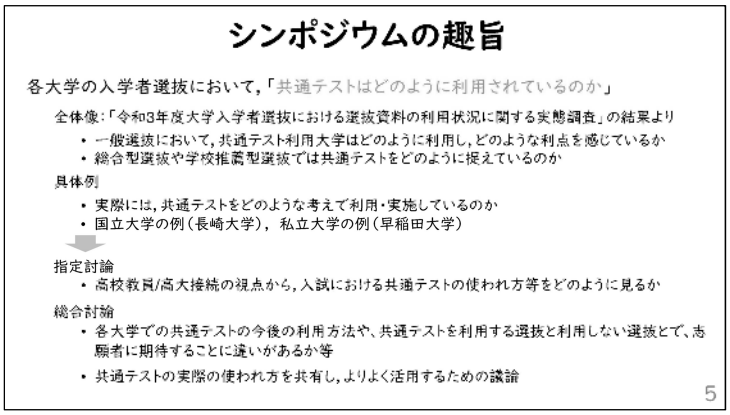
令和 3 年度からは、大学入学者選抜の入試方法の変更もありました。それまで一般入試、アドミッション・オフィス（AO）入試、推薦入試と呼ばれていたものが、令和 3 年度からはそれぞれ一般選抜、総合型選抜、学校推薦型選抜と呼ばれるようになりました。

変更されたものは、名称だけではありません。その内容にも変更があります。AO 入試では、「知識・技能の修得状況に過度に重点を置いた選抜基準とせず」、また、推薦入試では「原則として学力検査を免除し」と書かれており、どちらかというと学力検査を重視しない方針になっていました。

しかし、令和 3 年度大学入学者選抜実施要項では、総合型選抜では「調査書等の出願書類だけではなく、『見直しに係る予告』で示した評価方法等又は大学入学共通テストのうち少なくともいずれか一つを必ず活用し」と書いてあります。同じような文言は、学校推薦型選抜にも書いてあります。このように、活用する評価方法の一つとして、大学入学共通テストが取り上げられるようになりました。



これらの入試方法はどの程度利用されているのでしょうか。こちらのグラフは、直近 10 年間の選抜の種類別に見た国公私立大学の進学者数の推移を示したものです。令和 3 年度からは共通テストが始まりましたので、マーカーを白抜きで示しています。一般選抜による大学進学者が減少し、総合型選抜と学校推薦型選抜が少しずつ増加する傾向にあることが分かります。割合を見ますと、一般選抜では 49.5%、学校推薦型選抜では 37.6%、総合型選抜では 12.7%となっており、およそですが、大学に進学した者のうち半数は一般選抜から、残りの半数は学校推薦型選抜と総合型選抜のどちらかを経て進学をしているということになります。

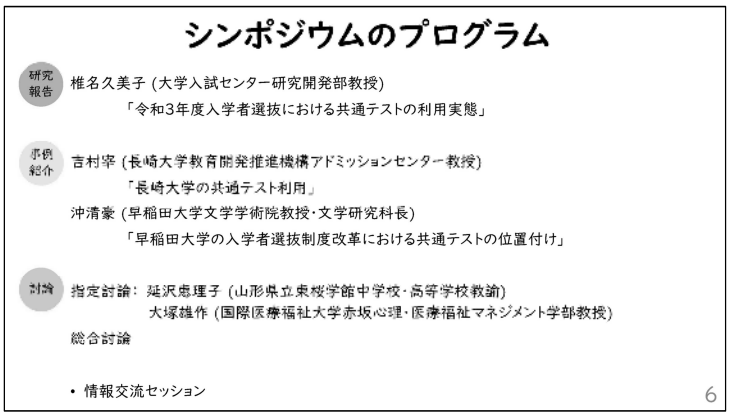


これまで共通テストというと一般選抜のイメージが強いかと思われますが、総合型選抜・学校推薦型選抜においても評価の方法の一つとして取り上げられるようになりました。

このような中で、共通テストはどのように利用されているのでしょうか。大学入試センターでは昨年度「令和 3 年度大学入学者選抜における選抜資料の利用状況に関する実態調査」という調査を実施いたしました。本シンポジウムでは、まず、こちらの調査の結果から共通テストの利用についての全体像をお示しします。

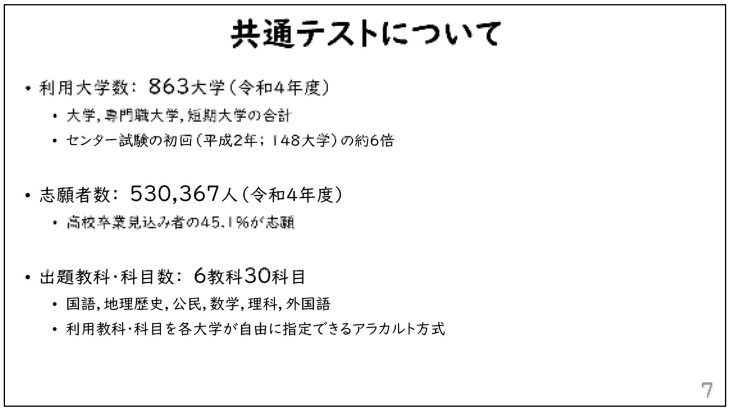
また、具体例として、実際には大学が共通テストをどのような考えで利用し実施しているのか、国立大学の例と私立大学の例をご紹介いただきます。これらの調査結果や具体例を踏まえまして、高校教員の視点あるいは高大接続の視点から、入試における共通テストの使わ

れ方等をどのように見るか指定討論をしていただきます。最後に、全員で総合討論を行います。



本日のシンポジウムのプログラムがこちらです。実態調査の結果を研究報告として、大学入試センター研究開発部教授の椎名久美子先生からお話しいただき、大学での事例紹介を長崎大学教育開発推進機構アドミッションセンター教授吉村宰先生から、また、早稲田大学文学学術院教授沖清豪先生からお話しいただきます。指定討論は、山形県立東桜学館中学校・高等学校教諭延沢恵理子先生と、国際医療福祉大学赤坂心理・医療福祉マネジメント学部教授大塚雄作先生にお願いいたしました。

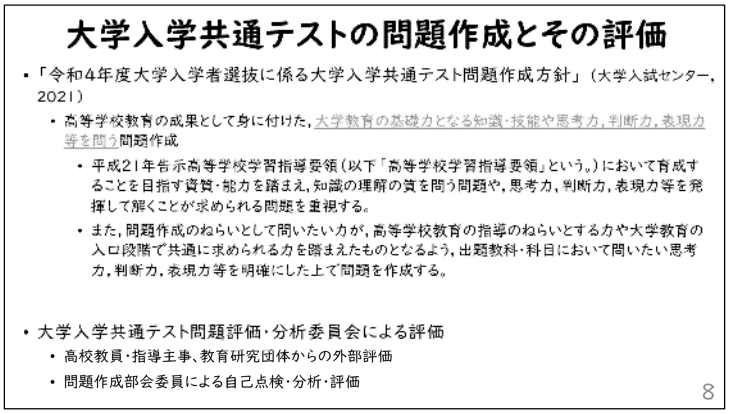
また、討論の後に情報交流セッションを設けまして、参加者の皆さまが直接やりとりをする機会も用意いたしました。



さて、後半は共通テストの概要をご紹介いたします。皆さまご存じのことも多いかと思いますが、問題を直接ご覧になる機会の少ない方もいらっしゃるかもしれませんので、本シンポジウムご参加の皆さまとここで共有を図りたいと思います。

まず、共通テストの概要です。ここに示しております数値は、いずれも令和 4 年度試験、すなわち今年の 1 月に実施された試験の数値になります。共通テストの利用大学数は、863 大学でした。センター試験の初回は 148 大学でしたので、その約 6 倍の数の大学が利用し

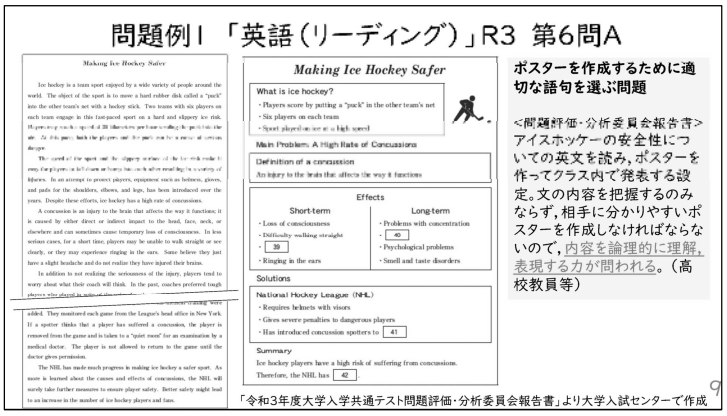
ています。志願者数は約 53 万人でした。高校卒業見込み者のうちの 45.1%が志願をしています。出題教科・科目数は、国語、地理歴史、公民、数学、理科、外国語の 6 教科 30 科目になります。センター試験と同様に、利用教科・科目を各大学が自由に指定できるアラカルト方式となっています。



さて、大学入学共通テストの問題作成ですが、その作成については「大学入学共通テスト問題作成方針」というものが公表されています。その中では「高等学校教育の成果として身に付けた、大学教育の基礎力となる知識・技能や思考力、判断力、表現力等を問う問題作成を行う」と書かれています。

また、問題を作るだけではなく、その問題に対する評価も行われています。共通テストの実施後に、毎年作成された問題のそれぞれにつきまして、大学入学共通テスト問題評価・分析委員会による評価が行われており、高校教員や指導主事、また、その科目の教育研究団体からの外部評価と問題作成部会の委員による自己点検・分析・評価が行われています。

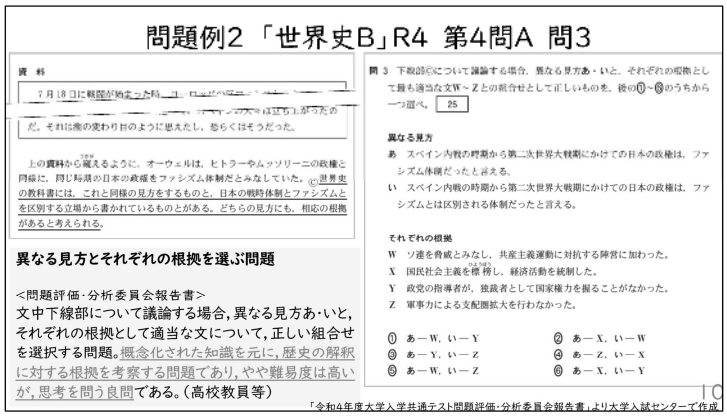
この後、問題を 3 つご紹介いたしますが、そちらのスライドで紹介されているコメントは、この大学入学共通テスト問題評価・分析委員会による評価から抜き出したものになります。



ここから具体的な問題例をご紹介していきます。共通テストでは、さまざまな問題が作成されています。1 つの科目内でもさまざまな問題がありますので、これからご紹介する例が全てではないのですが、時間の限りがありますので、あくまでも一例ということでご容赦いただければと思います。

まず、英語リーディングの問題です。字が小さくて読みにくいかと思いますが、アイスホッケーの安全性についての英文が 2 ページほどにわたって書かれています。そちらを読んで、ポスターを作ろうという問題です。このポスターを作るために、適切な語句を選ぶという問題になっています。

高校教員による評価では「文の内容を把握するのみならず、相手に分かりやすいポスターを作成しなければならないので、内容を論理的に理解、表現する力が問われる」という評価を頂いています。


問題例2 「世界史B」R4 第4問A 問3

資 料

7月18日に戦闘が始まった時、[illegible]だ。それは癒の変わり目のように思えたし、恐らくはそうだった。

上の資料から窺(うかが)えるように、オーウェルは、ヒトラーやムッソリーニの政権と同様に、同じ時期の日本の政権をファシズム体制だとみなしていた。(C)世界史の教科書には、これと同様の見方をするものと、日本の戦時体制とファシズムとを区別する立場から書かれているものとがある。どちらの見方にも、相応の根拠があると考えられる。

異なる見方とそれぞれの根拠を選ぶ問題

<問題評価・分析委員会報告書>
文中下線部について議論する場合，異なる見方あ・いと，それぞれの根拠として適当な文について，正しい組合せを選択する問題。概念化された知識を元に，歴史の解釈に対する根拠を考察する問題であり，やや難易度は高いが，思考を問う良問である。（高校教員等）

問 3 下線部Ⓒについて議論する場合，異なる見方あ・いと，それぞれの根拠として最も適当な文W～Zとの組合せとして正しいものを，後の①～⑧のうちから一つ選べ。 25

異なる見方

あ スペイン内戦の時期から第二次世界大戦期にかけての日本の政権は，ファシズム体制だったと言える。

い スペイン内戦の時期から第二次世界大戦期にかけての日本の政権は，ファシズムとは区別される体制だったと言える。

それぞれの根拠

W ソ連を脅威とみなし，共産主義運動に対抗する陣営に加わった。

X 国民社会主義を標榜(ひょうぼう)し，経済活動を統制した。

Y 政党の指導者が，独裁者として国家権力を握ることがなかった。

Z 軍事力による支配圏拡大を行わなかった。

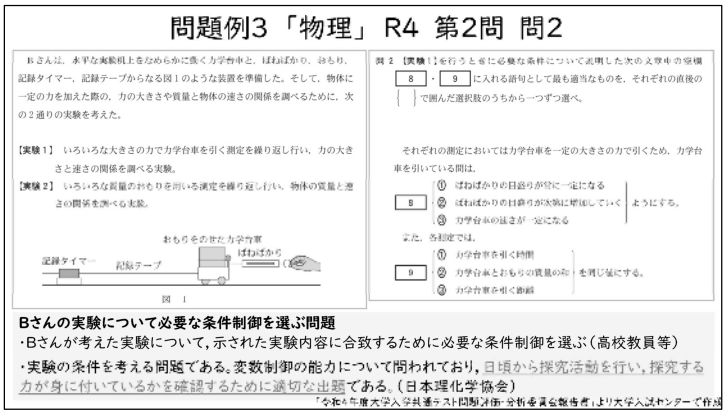
① あ－W，い－Y　② あ－X，い－W
③ あ－Y，い－Z　④ あ－Z，い－X
⑤ あ－W，い－Z　⑥ あ－X，い－Y

10

「令和4年度大学入学共通テスト問題評価・分析委員会報告書」より大学入試センターで作成

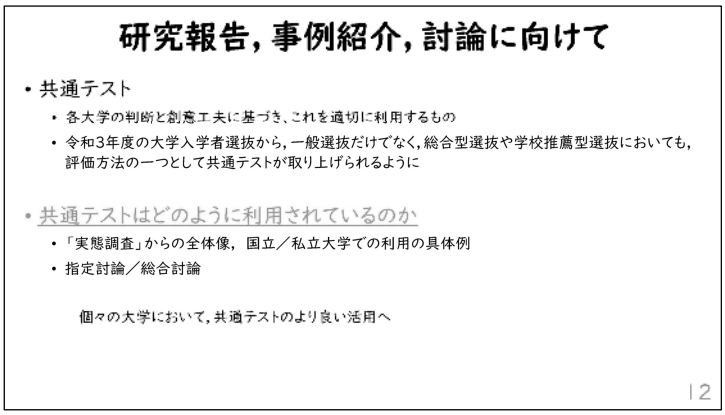
次の問題例は世界史 B の問題です。この問題では、資料として短めの文章が与えられており、その資料に関する文章が続いています。この文章の下線部分のところでは、「この資料と同様の見方をするものと、異なる見方をするものとがあり、どちらにも相応の根拠がある」という説明が書いてあります。問 3 では、2 つの異なる見方とその根拠は何か考えさせる問題になっています。

こちらの問題については、高校教員から「概念化された知識を基に歴史の解釈に対する根拠を考察する問題であり、やや難易度は高いが、思考を問う良問である」というコメントがなされています。



問題例 3 は物理の問題です。この問題では B さんがあることを確かめようとして実験をしています。その実験をする時にどのような条件で行えばよいかを考えさせる問題になっています。

この問題につきましては、教育研究団体から「日頃から探究活動を行い、探求する力が身についているかを確認するために適切な出題である」という評価がなされています。



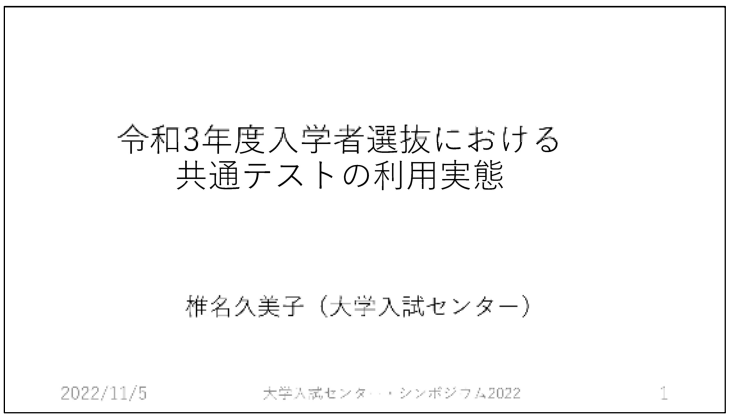
以上で趣旨説明と共通テストの概要の紹介を終わります。共通テストについては、「各大学の判断と創意工夫に基づき、これを適切に利用するもの」とされており、令和 3 年度の大学入学者選抜から一般選抜だけでなく、総合型選抜や学校推薦型選抜においても評価方法の一つとして取り上げられるようになりました。このような中で、共通テストはどのように利用されているのでしょうか。実態調査からの全体像、また、国立大学・私立大学での利用の具体例に基づいて、指定討論や総合討論を行い、その中で議論が深まり、個々の大学において共通テストのより良い活用へとつなげることができれば幸いです。皆さま、本日のシンポジウムどうぞよろしくお願いいたします。

少々早いのですが、私の報告はこれで終わりにいたします。ありがとうございました。

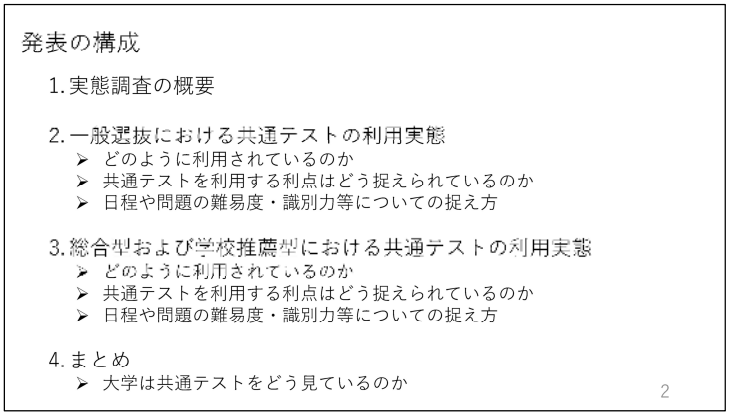
■ 研究報告

令和３年度入学者選抜における共通テストの利用実態

椎名 久美子（大学入試センター研究開発部教授）



【椎名】　大学入試センター研究開発部の椎名久美子と申します。私の発表では、令和３年度入学者選抜における共通テストの利用実態について、調査で得たデータに基づいてお話をいたします。正式名称は大学入学共通テストなのですが、長いので略称で共通テストと呼ばせていただくことにいたします。



まず、発表の構成です。最初に実態調査の概要を説明して、次に、一般選抜における共通テストの利用実態について説明をいたします。どのように利用されているのか、共通テストを利用する利点は大学にどう捉えられているのか、そして、日程や試験問題の難易度、識別力等に関する大学の考えに関して、調査データから見える傾向を説明いたします。総合型お

よび学校推薦型選抜における共通テストの利用実態についても同様に説明をいたします。最後に、大学は共通テストをどう見ているのかについてまとめます。

1. 実態調査の概要

3

共通テストの利用実態に関する調査項目
―利用実態の把握のために，どんな項目を尋ねたか(※)―

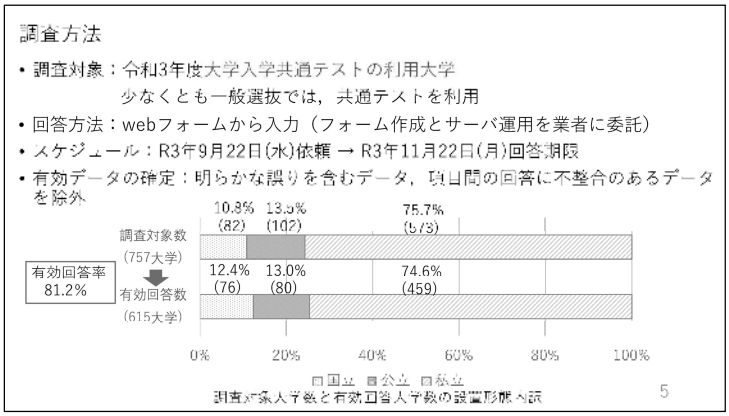
	入試区分			質問内容	回答形式
	一般	総合型	学校推薦型		
項目番号	QB-1			共通テストを課している入試区分	選択（複数選択可）
	QB-2	QB-6	QB-10	共通テストの利用方法	選択（複数選択可）
	QB-3	QB-7	QB-11	共通テストを利用する利点 ・6項目について当てはまる程度 ・その他の利点	4段階評定 自由記述
	QB-4	QB-8	QB-12	共通テストの日程，難易度，識別力等について ・5項目について当てはまる程度 ・大学独自の段階表示得点の利用	4段階評定（1項目のみ5段階） 利用の有無＋自由記述
	QB-5	QB-9	QB-13	共通テストが選抜に役立ったか	4段階評定

※ R3～5年度理事長裁量経費研究「大学で学ぶための基礎的学力の新たな評価制度の開発に関する研究」（研究代表者：椎名）の一環としてR3年度に実施した実態調査の一部

4

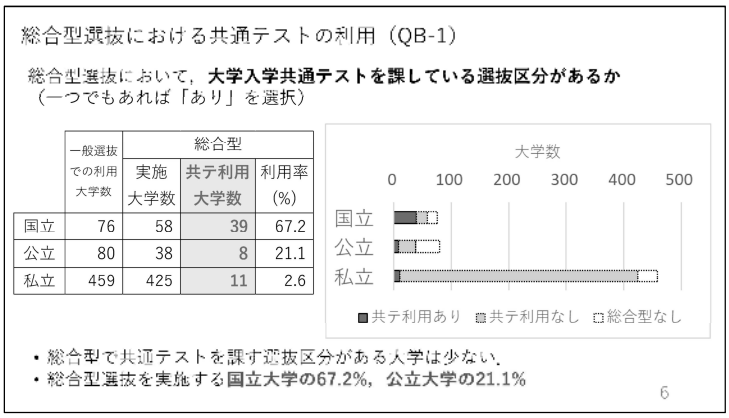
まず、実態調査の概要についてお話をいたします。これからお話をする共通テストの利用実態は、当センターの理事長裁量経費研究として、私が代表者となって実施している研究結果の一部をご紹介するものです。令和 3 年秋に実施した調査のうち、共通テストに関する部分の分析結果をご紹介するものです。

こちらの表は、共通テストの利用実態を把握するためにどのような質問項目を設定したのかという構成を示すものです。大きく分けると 13 個の質問項目があります。最初に QB-1 で、一般選抜、総合型選抜、学校推薦型選抜において共通テストを課している選抜区分が一つでもあれば課しているものとして選択をしてもらいます。QB-2 以下の質問は、一般選抜、総合型、学校推薦型選抜それぞれにおいて共通テストをどのように選抜に利用したのか、そして、共通テストを利用する利点、共通テストの日程、難易度、識別力等についての捉え方、そして、共通テストが選抜に役立ったかということをそれぞれ尋ねる質問項目になっています。



調査方法について説明をいたします。調査対象としたのは令和 3 年度共通テストの利用大学です。私立大学で共通テスト利用入試などの名称で実施されているものも一般選抜の一つですので、調査対象大学は少なくとも一般選抜では共通テストを利用しているということになります。各利用大学の入試担当課に実態調査への協力依頼状を送付して、各大学の入学者選抜を総合的に把握している方に回答いただくよう手配を依頼しました。本日のシンポジウムに参加なさっている中に、この調査にご協力くださった関係者の皆さまがいらっしゃるかもしれません。改めて感謝申し上げます。

回答はウェブフォームから 1 大学 1 通で入力してもらいました。令和 3 年 9 月に依頼をして、2 カ月後の 11 月 22 日を回答期限といたしました。その後、明らかな誤りを含むデータなどを除外しまして、最終的に 615 大学からの回答を有効としました。こちらの図は、調査対象大学と有効回答大学の設置形態の内訳を示しています。調査対象の約 8 割から有効回答を得ました。国公私立の比率ですが、調査対象と有効回答で大きな開きはありません。有効回答のうち、国立大学が 12.4%、公立大学が 13.0%、そして私立大学が 74.6%となっています。

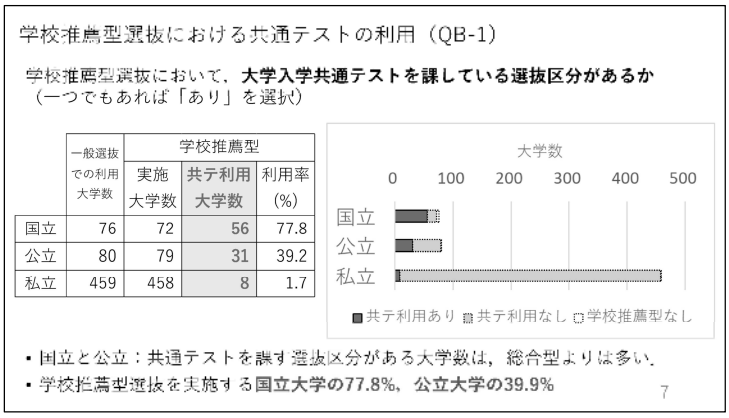


	一般選抜での利用大学数	総合型		
		実施大学数	共テ利用大学数	利用率(%)
国立	76	58	39	67.2
公立	80	38	8	21.1
私立	459	425	11	2.6

さて、調査対象大学は、少なくとも一般選抜では共通テストを利用しているわけですが、では、総合型選抜で共通テストを利用している区分があると回答した大学はどれぐらいあ

るでしょうかということで、スライド左の表に総合型選抜を実施している大学の数を示していますが、その隣の列の数字は、総合型で共通テストを課す選抜区分がある大学の数です。右の棒グラフでは、総合型選抜で共通テストを課す選抜区分がある大学の数、総合型選抜を実施しているがその中に共通テストを課す区分はない大学の数、一般選抜では共通テストを利用しているが総合型選抜は実施していない大学の数を示しています。

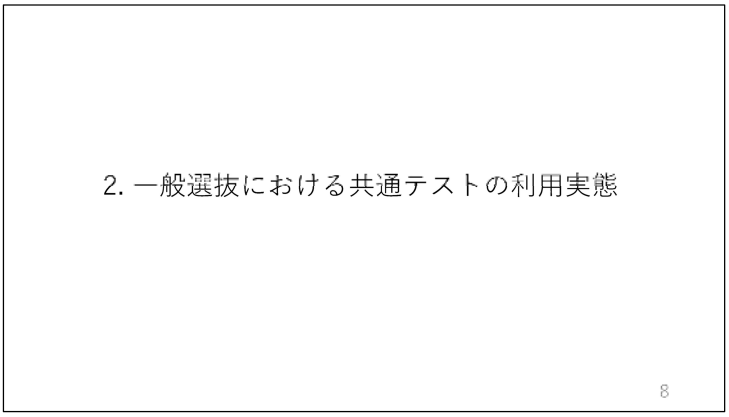
このように、大学の数で見ますと、総合型選抜で共通テストを課す選抜区分がある大学というのはまだ少ないのですが、国立では、総合型選抜を実施している 58 大学のうちの 67.2%、公立では 38 大学のうちの 21.2%で、共通テストを課す総合型選抜が実施されています。

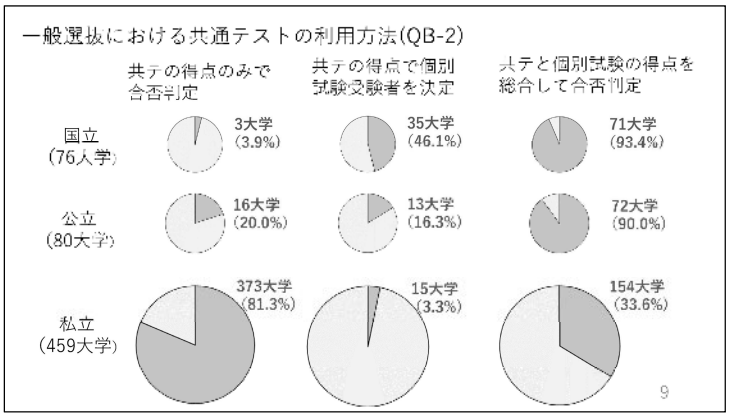


	一般選抜での利用大学数	学校推薦型		
		実施大学数	共テ利用大学数	利用率(%)
国立	76	72	56	77.8
公立	80	79	31	39.2
私立	459	458	8	1.7

では、学校推薦型で共通テストを利用している区分がある大学はどれぐらいかということで、このスライドの左の表には学校推薦型選抜を実施している大学数を示していますが、表からお分かりのように、ほとんどの大学で学校推薦型選抜自体は実施されています。その隣の列は、学校推薦型選抜で共通テストを課す選抜区分がある大学の数です。右の棒グラフでは、学校推薦型で共通テストを課す区分がある大学の数、学校推薦型選抜を実施しているがその中に共通テストを課す区分はない大学の数、一般選抜では共通テストを実施しているが学校推薦型選抜は実施していない大学の数を示しています。

国立と公立につきましては、先ほどの総合型選抜よりも、共通テストを課す選抜区分があるという大学の数は多いです。割合で見ますと、国立では、総合型では 67.2%ですが、学校推薦型では 77.8%です。公立では総合型では 21.2%ですが、学校推薦型では 39.2%です。国公立大学では総合型よりも学校推薦型で共通テストを課す選抜を実施している大学の割合が高いということになります。私立大学に関しては、先ほどの総合型では 2.6%、そして学校推薦型では 1.7%ということで、どちらも割合としては低くなっています。



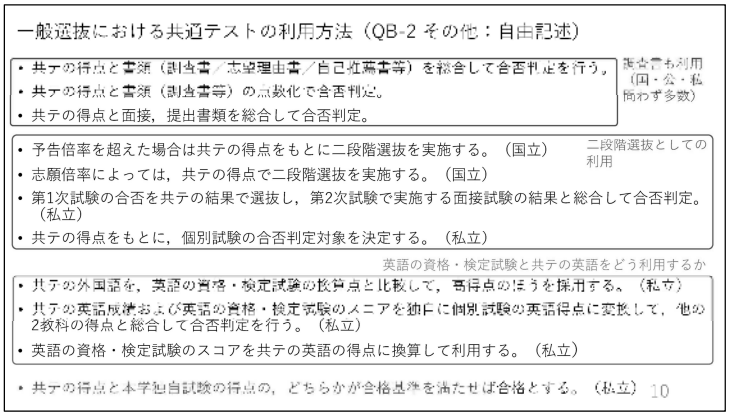


まず、共通テストのメインの使われ方である一般選抜に焦点を当ててどのような利用実態かを説明します。一般選抜における共通テストの利用方法に関して、3 つの選択肢―「共通テストの得点のみで合否判定を行う」「共通テストの得点をもとに個別試験の受験者を決定する（いわゆる 2 段階選抜）」「共通テストと個別試験の得点を総合して合否判定を行う」―のうち該当するものを全て選択してもらった結果を、このグラフは示しています。

利用大学数がもともと国公私立で違いますので、設置形態ごとに円の大きさを変えて示しています。円グラフには、それぞれの利用方法を使っていると回答した大学の数と割合を示しています。「共通テストの得点のみで合否判定を行う」という利用方法を見ますと、私立大学では 81.3％がその方法を使っているということで、非常に割合が高くなっています。そして、「共通テストと個別試験の得点を総合して合否判定を行う」という方法に関しては、国立と公立ではどちらも 90％台になっています。真ん中のいわゆる「2 段階選抜」については、国立大学では 46.1％で利用されています。

このグラフでどこが多いかというのを見ますと、私立では「共通テストの得点のみで合否判定を行う」、そして国公立では「共通テストと個別試験の得点を総合して合否判定を行う」という使い方をしている大学の割合が多いです。これは参加者の皆さまがお持ちの印象と一致しているかと思いますが、スライドの右下のグラフに示すように、私立大学でも約 3 分の 1 の大学では「共通テストと個別試験の得点を総合して合否判定を行う」という利用方

法が用いられています。



この 3 つの選択肢の他に、自由記述で回答された利用方法について、次のスライドで説明をいたします。多数の大学がその他の方法というのを自由記述で回答してくださったのですが、それらの内容を大まかに分類してこのスライドに示しています。国立・公立・私立を問わず非常に多かったのが、共通テストの得点と、書類一具体的には調査書とか志望理由書、そして自己推薦書などが書かれていたのですが、そういった書類を総合して合否判定を行うという利用方法です。

調査書などの書類を点数化して、共通テストの得点と合わせて合否判定をするという回答もありました。また、調査書などの書類だけではなくて共通テストの得点と面接を総合してといった趣旨の回答も目立ちました。共通テストを 2 段階選抜として利用するということに関しても、自由記述でいろいろと説明がありました。共通テストの得点を基に個別試験の合否判定対象を決定するという回答もありました。これは個別試験を全ての志願者に受けてもらった上で、共通テストの得点を 2 段階選抜的に使うという意味だと思われます。

また、英語の資格検定試験と共通テストの英語をどう利用するかという点に関しての回答もありました。共通テストの外国語の得点を英語の資格検定試験の換算点と比較をして高得点のほうを用いるなどの回答がありました。また、1 校だけですが、共通テストの得点と大学独自の試験の得点のどちらかが合格基準を満たせば合格とするという回答もありました。これらの記述からは、一般選抜においても多くの大学が共通テストを工夫して利用しているということがうかがえます。

共通テストを利用する利点について(QB-3)

一般選抜において大学入学共通テストを利用する利点として次の(a)～(f)の項目について当てはまる程度を一つずつ選択してください。また，その他に利点があれば(g)に記入してください。

1. 当てはまらない　2. あまり当てはまらない　3. やや当てはまる　4. 当てはまる

(a) 試験問題が信頼できる（内容，出題範囲，難易度等）
(b) 各受験生が居住地で受験できる
(c) 試験科目数が多い
(d) 受験生に課す試験科目を選ぶことができる
(e) 選抜に必要な試験結果の情報が提供される
(f) 自大学で試験問題を作成しなくてよい
(g) その他（自由記述）

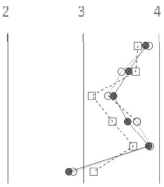
11

では、一般選抜において共通テストを利用する利点を大学はどのように捉えているのかということで、(a)から(f)の 6 項目について、「1. 当てはまらない」から「4. 当てはまる」までの 4 段階で評定をしてもらいました。「(a)試験問題が信頼できる」、これは内容、出題範囲、難易度等に関する項目です。「(b)各受験生が居住地で受験できる」「(c)試験科目数が多い」「(d)受験生に課す試験科目を選ぶことができる」「(e)選抜に必要な試験結果の情報が提供される」「(f)自大学で試験問題を作成しなくてよい」、この 6 項目です。その他の利点については、自由記述で回答をしてもらいました。

なお、総合型と学校推薦型選抜でも同じ項目に関して評定をしてもらいました。それらの結果も後ほど説明をいたします。

一般選抜において共通テストを利用する利点について(QB-3)

(a) 試験問題が信頼できる(内容，出題範囲，難易度等)
(b) 各受験生が居住地で受験できる
(c) 試験科目数が多い
(d) 受験生に課す試験科目を選ぶことができる
(e) 選抜に必要な試験結果の情報が提供される
(f) 自大学で試験問題を作成しなくてよい



(a)～(f)の利点に当てはまる程度の平均値（設置形態別）
●：国立（76大学），○：公立（80大学），□：私立（459大学）

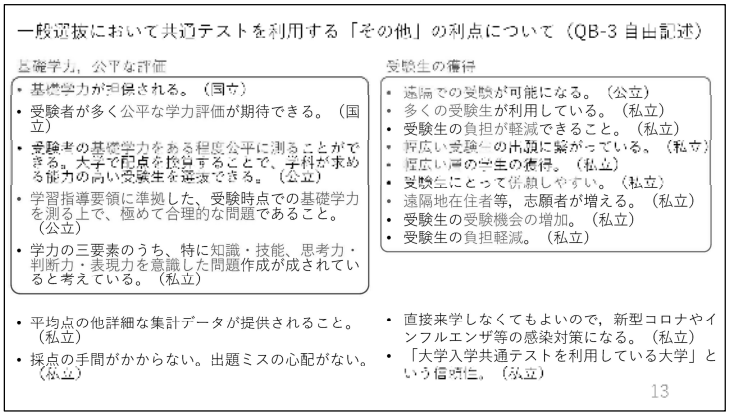
- 国立と公立はほぼ同じ傾向．(a) と(e)を利点と考える傾向．
- 私立は(a)，(b)，(e)を利点と考える傾向．
- (c)，(d)は，国公立で利点として評価される傾向．

12

このグラフは(a)から(f)の項目に関して設置形態別に各項目の評定の平均値をプロットしたものです。黒丸が国立大学、白丸が公立大学、四角が私立大学の平均値です。黒丸と白丸、すなわち、国立と公立の傾向は非常に類似していまして、この 6 項目の中では「(a)試験問題への信頼」と「(e)試験結果の情報の提供」を利点と考える傾向が強くなっています。私立大学でもこの(a)と(e)の平均値は折れ線を見ると非常に高いのですが、それ以外に「(b)各受験生が居住地で受験できる」という点も、私立大学ではかなり利点と捉えられている傾向です。

「(f)自大学で試験問題を作成しなくてよい」という点は、どの設置形態でも 6 項目の中ではそれほど利点とは見なされていません。

「(c)試験科目数が多い」と「(d)受験生に課す試験科目を選ぶことができる」に関しては、私立よりも国公立で利点と考える傾向がやや強めです。先ほど利用方法のところで見ていただいたように、国公立の 90%以上の大学が「共通テストと個別試験の得点を総合して合否判定を行う」という利用方法を用いているということを考え合わせますと、共通テストと個別試験を組み合わせて選抜を行う際に、自大学が受験生に求める要件に応じて共通テストで課す試験科目をたくさんの中から選べるという点がメリットと感じられているのではと推察されます。



これら 6 項目の他に、自由記述によるその他の利点から見えてくる傾向について、次のスライドで説明をいたします。スライドは一般選抜において共通テストを利用する利点として、自由記述の回答内容をまとめたものです。左の枠で囲んだのは、基礎学力や公平な評価に言及した回答をまとめたものです。基礎学力の担保や学習指導要領に準拠して基礎学力を測る上で合理的な問題であること。そして、知識・技能、思考力・判断力・表現力を意識した問題作成がなされていることなどの記載が見られました。これらは先ほど 6 項目の中で試験問題が信頼できるという評定の平均値が高かったことにも通じる内容かと思います。

右の枠で囲んだのは、受験生の獲得につながるような内容の回答です。幅広い受験生の出願につながるとか、受験者の負担軽減になる、受験生の受験機会の増加などの回答が私立大学に多く見られます。

その他、採点の手間がかからないことや、コロナやインフルエンザの感染対策になるという回答もありました。また、共通テストを利用している大学という信頼性という指摘もございました。

共通テストの日程や問題の難易度・識別力等について（QB-4）

一般選抜において大学入学共通テストに関する次の項目について当てはまる程度を一つずつ選択してください。

(a)(b)(d)(e): 1. 当てはまらない 2. あまり当てはまらない 3. やや当てはまる 4. 当てはまる
(c): 1. 易しい 2. やや易しい 3. どちらともいえない 4. やや難しい 5. 難しい

(a) 試験の実施日程が適切である
(b) 成績の提供日程が適切である
(c) 自大学の受験生にとっての試験問題の難易度
(d) 自大学にとっての試験問題の難易度が適切である
(e) 試験問題の識別力（受験生の成績に差がつくかどうか）が適切である
(f) 共通テストの得点を大学独自の段階表示に変換して利用した

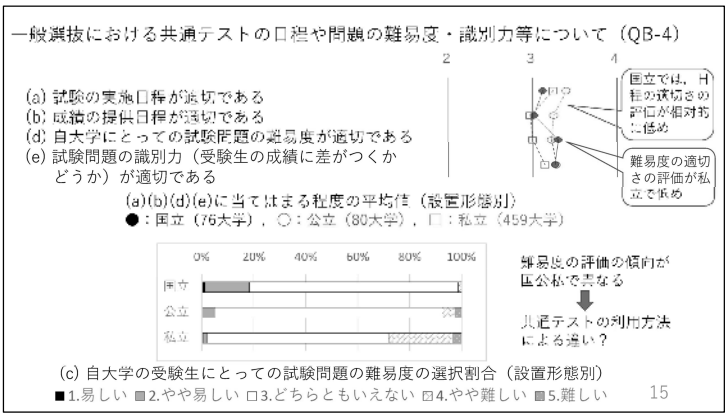
14

次に、一般選抜において共通テストの日程、そして試験問題の難易度・識別力等を大学としてどう考えるかということで、(a)から(e)の 5 項目について評定をしてもらいました。「(a)試験の実施日程が適切である」「(b)成績の提供日程が適切である」、1 つ飛びますが、「(d)自大学にとって試験問題の難易度が適切である」「(e)試験問題の識別力、つまり受験生の成績に差が付くかどうかが適切である」の 4 項目については、「1. 当てはまらない」から「4. 当てはまる」の 4 段階で評定をしてもらいました。

「(c)自大学の受験生にとっての試験問題の難易度」については、「1. 易しい」から「5. 難しい」までの 5 段階での評定です。難易度に関する質問項目が(c)と(d)の 2 つありますが、(d)は難易度が適切であるということで、それだけだと易しくて適切なのか難しくて適切なのかというのが分からないということで、(c)として難易度を 5 段階で評定する項目も設けました。

なお、「(f)共通テストの得点を自大学独自の段階表示に変換して利用した」については、共通テストの得点を、当センターが提供するスタナインに類似した段階表示にしたものを大学で使っているかという意味で質問項目に入れたのですが、利用方法に関する回答を見ますと、科目別の配点のことで占められていました。(f)についてはこちらの質問の意図がうまく伝わらなかったようですので、本日は割愛いたします。

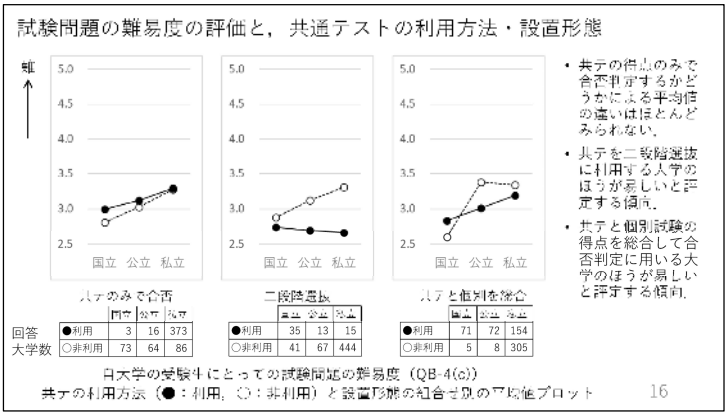
これらの項目に関しても、総合型と学校推薦型選抜で同じ項目を評定してもらいましたので、後ほど説明いたします。



スライドの上に示す折れ線グラフは、先ほどの(a)(b)(d)(e)に関して設置形態別に各項目の評定の平均値をプロットしたものです。黒丸が国立大学、白丸が公立大学、四角が私立大学です。

黒丸で示す国立大学ですが、4 項目の折れ線を見ていただきますと、「(a)試験の実施日程の適切さ」と「(b)成績の提供日程の適切さ」に関する評定が、「(d)自大学にとっての試験問題の難易度」や「(e)試験問題の識別力」の評定に比べて相対的に低くなっています。白丸で示す公立大学では、4 つの項目で平均値が特に低いものは見られません。四角で示す私立大学に関しては、「(b)成績の提供日程の適切さ」と「(d)試験問題の難易度の適切さ」の平均値が他の項目に比べてやや低いという状況になっています。「(d)自大学にとっての試験問題の難易度が適切である」という項目に関しては、設置形態別で比べてみますと、私立大学の平均値が国公立よりも少し低くなっています。

では、「(c)自大学の受験生にとっての試験問題の難易度」についてはどうなっているかということで、「易しい」から「難しい」までの 5 段階の回答がどういう割合になっているかというのを、スライドの下のグラフに示しています。国公私立全てにおいて、「どちらともいえない」という回答が大部分を占めているのですが、私立大学では「やや難しい」と「難しい」を合わせると 3 割弱になっています。それに対して国立では「易しい」と「やや易しい」を合わせた割合が 2 割弱を占めます。難易度の評価の傾向も設置形態で異なっているようです。この難易度の評価については、次のスライドで、共通テストの利用方法という点からも見てみたいと思います。

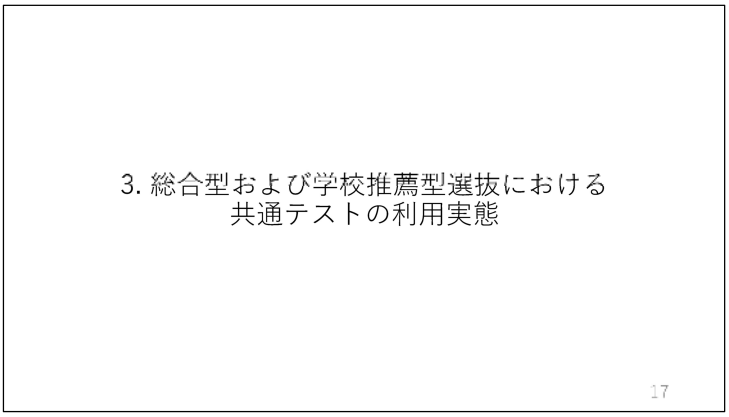


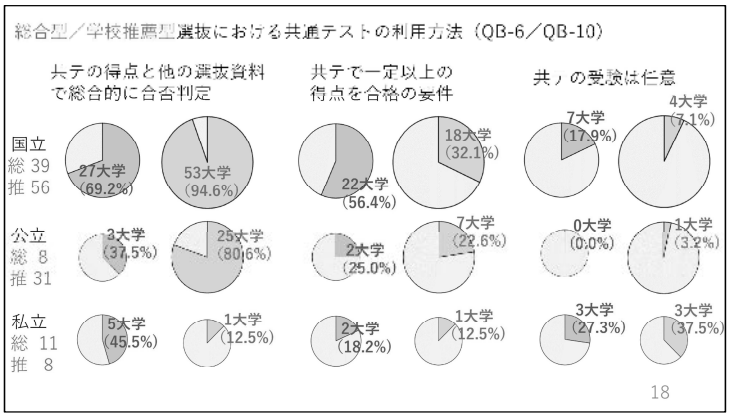
こちらは「(c)自大学の受験生にとっての試験問題の難易度」の評価に関して、共通テストの利用方法と設置形態の組合せで見ようとしているグラフです。「(c)自大学の受験生にとっての試験問題の難易度」の評定は 5 段階ですが、共通テストの 3 つの利用方法それぞれに関して、その方法を用いているかどうかと設置形態の組合せ別に評定の平均値を算出してプロットしたのが、この 3 枚のグラフです。

3 つのグラフに共通ですが、横軸が国立・公立・私立の設置形態、折れ線はそれぞれの利用方法を利用している大学が黒丸、していない大学が白丸という区別を示しています。それぞれの方法を利用しているかどうかと設置形態の組合せの大学の数については、それぞれのグラフの下の表に示してあります。縦軸は、難易度の評定の平均値で、数字が大きいほど難しいという評定になります。

一番左のグラフは、「共通テストの得点のみで合否判定を行う」という利用方法に関するプロットです。利用している大学の黒い折れ線と利用してない大学の白い折れ線の違いはほとんど見られません。真ん中のグラフは「2 段階選抜」に関するプロットで、2 段階選抜で共通テストを利用するという黒い折れ線の大学のほうが試験問題を易しいと評定する傾向です。これは共通テストで高得点を取るような志願者が集中して 2 段階選抜が必要になるということを反映していると考えられます。

一番右のグラフは、「共通テストと個別試験の得点を総合して合否判定を行う」という利用方法に関するプロットです。黒の「利用している」と白の「利用してない」の折れ線が交差しているのですが、検定してみると有意な交互作用というのは認められません。全体として、「共通テストと個別試験の得点を総合して合否判定を行う」という方法を用いる黒い折れ線の大学のほうが、そうでない大学よりも易しいと評定する傾向になっています。





ここからは総合型および学校推薦型選抜に焦点を当てて、どのような利用実態かというのを説明いたします。

総合型と学校推薦型選抜における共通テストの利用方法に関する選択肢は、先ほどの一般選抜に関する選択肢とは異なるものを用いています。「共通テストの得点と他の選抜資料で総合的に合否判定を行う」「共通テストで一定以上の得点を合格の要件とする」「共通テストの受験は任意とする」という 3 つの選択肢を設けています。該当するもの全て選んでもらうという点は、一般選抜の質問項目への回答の仕方と同じです。その他の利用方法は自由記述で回答してもらいました。

総合型選抜については左側、学校推薦型については右側の円グラフが、それぞれの利用方法を用いている大学の数と割合です。総合型で共通テストを利用している選抜区分があるという大学は、国立では 39、公立では 8 、私立では 11 ということで、特に公立と私立では少ない状況です。学校推薦型で共通テストを利用している選抜区分がある大学は、国立では 56、公立では 31 あり、総合型よりも学校推薦型で利用している大学数が多くなっています。私立の学校推薦型で利用しているというのは 8 しかありません。

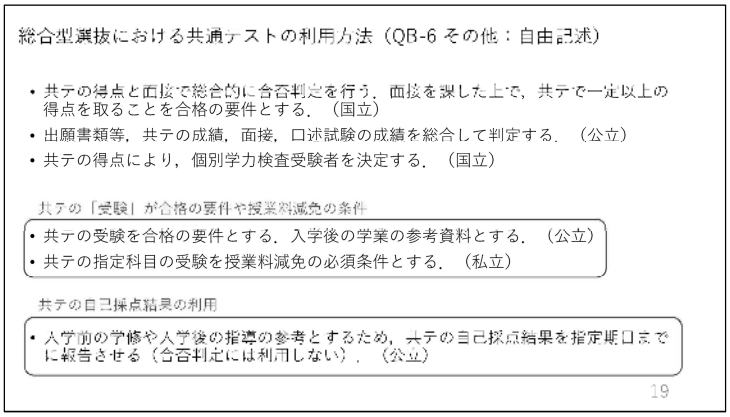
それぞれの利用方法に関して、スライドの左端に書いた数字を分母として、3 つそれぞれの利用方法を使っている大学の割合をこれらの円グラフで示しています。ただ、 8 や 11 のように大学の数が少ないところについては、割合は参考値とお考えください。

「共通テストの得点と他の選抜資料で総合的に合否判定を行う」という利用方法を用いる国立大学の割合は、総合型では 69.2%ですが、学校推薦型ではそれより多くて 94.6%になっています。

「共通テストで一定以上の得点を合格の要件とする」という利用方法に関しては、国立では総合型で 56.4%ですが、学校推薦型ではそれよりも少なくて 32.1%となっています。国立大学では、この 2 つの利用方法に関して、学校推薦型で用いられる割合が高い方法、総合型で用いられる割合が高い方法のように傾向が分かれていまして、こういった違いに総合型と学校推薦型で共通テストをどう使うかという考え方の違いが表れていそうです。

公立の学校推薦型に関しては、左の 2 つの利用方法を用いる大学の割合が国立大学に比較的近い値となっています。

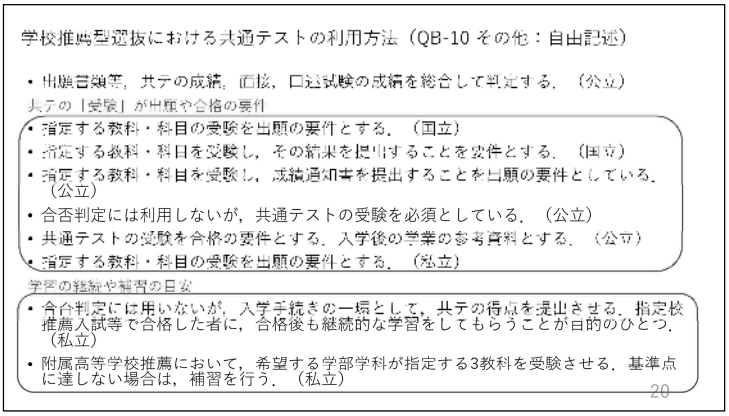
一番右端の「共通テストの受験は任意とする」という利用の仕方をしている大学は非常に少ないという状況です。



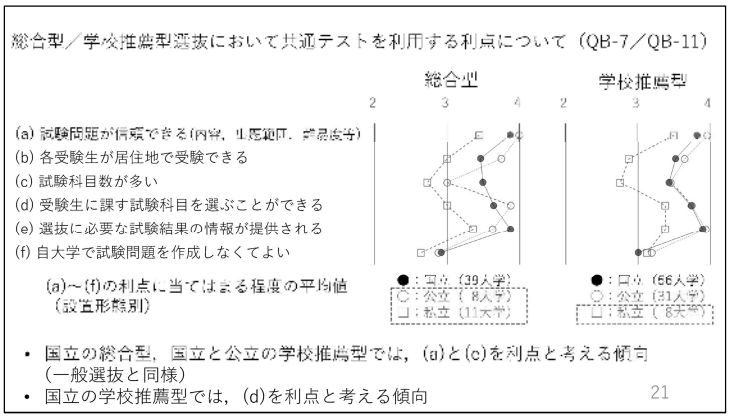
3 つの選択肢の他に、自由記述で回答された利用方法について、次のスライドで説明をします。

まず、総合型選抜における利用方法に関する自由記述です。出願書類や面接、口述試験の成績等を総合して判定したり、あるいは共通テストの得点で 2 段階選抜をしたりといった利用方法は一般選抜でも見られた利用方法ですが、一般選抜では見られなかった利用方法として、共通テストの受験を合格の要件や授業料減免の条件とするという回答が見られました。また、共通テストを合否判定には利用しないけれど、自己採点結果を報告させて入学前の学習や入学後の指導の参考にするという回答もありました。

このような回答は、共通テストの得点を合否判定の材料とするわけではないという点で、総合型選抜に特徴的な利用方法といえるでしょう。

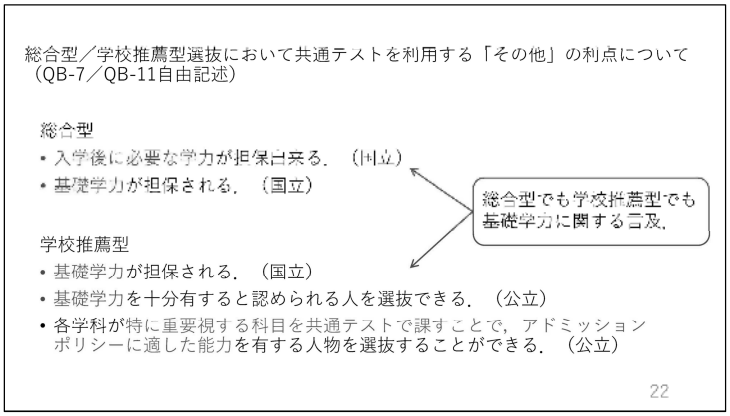


次に、学校推薦型選抜における共通テストのその他の利用方法に関してですが、出願書類や面接、口述試験の成績と総合して判定という回答もあったのですが、共通テストの得点を合否判定の材料としないという利用方法が、先ほどの総合型選抜と同様に、自由記述で多く見られています。指定する教科・科目を受験することを出願の要件としたり、共通テストの受験を合格の要件としたりといった利用方法が回答されています。また、推薦で合格した後も学習を継続してもらうために入学手続きの一環として共通テストの得点を提出させるという回答や、附属高校推薦において指定する教科を受験させて、基準点に達しない場合に補習を行うという回答が見られました。スライドの一番下の枠で囲んだような、学習の継続や補習の目安への言及というのは、先ほどの総合型におけるその他の利用方法では見られなかったものです。



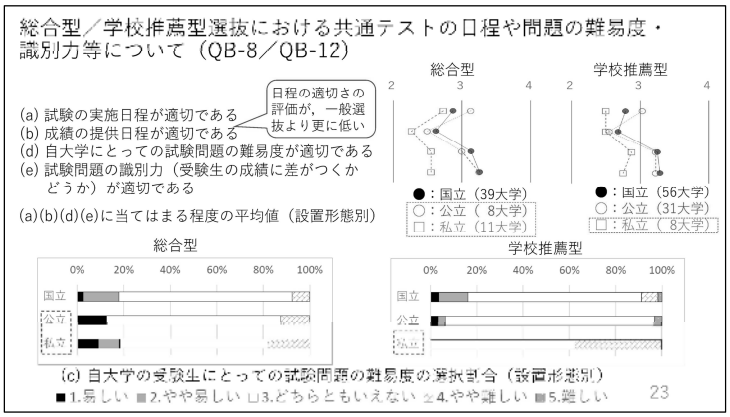
では、総合型および学校推薦型選抜において共通テストを利用する利点について大学はどう考えているのかということで、先ほどの一般選抜と同じ項目に関して 4 段階評定の平均値のプロットを示しています。数字が大きいほうが当てはまるという評定をされているということです。黒丸が国立、白丸が公立、四角が私立ですが、利用大学の数が少ない設置形態についても参考としてプロットをしてあります。

利用大学数の多いところは、総合型では黒丸で示す国立、学校推薦型では黒丸で示す国立と白丸で示す公立です。それらにおいては、6 項目の中で「(a)試験問題が信頼できる」と、「(e)選抜に必要な試験結果の情報が提供される」の 2 つを利点と考える傾向が強く出ていまして、これは一般選抜と同様の傾向です。そして、国公立の学校推薦型では、「(d)受験生に課す試験科目を選ぶことができる」も(a)や(e)に次いで平均値が高くなっており、この点も一般選抜と類似しています。先ほどのスライドで示したように、国公立の学校推薦型では「共通テストの得点と他の選抜資料で総合的に合否判定を行う」という方法の利用率が高いので、他の選抜資料と組み合わせて選抜を行う際に、たくさんの中から試験科目を選んで課せる点がメリットとして感じられているのではと推察されます。



その他の利点として、総合型でも学校推薦型でも自由記述にありましたのが、基礎学力に関する言及です。この基礎学力への言及というのは、一般選抜で共通テストを利用するその他の利点としても自由記述で書かれていたことです。

また、学校推薦型に関しては、特に重要視する科目を共通テストで課すことで、アドミッション・ポリシーに適した能力を有する人物を選抜することができるという回答がありました。

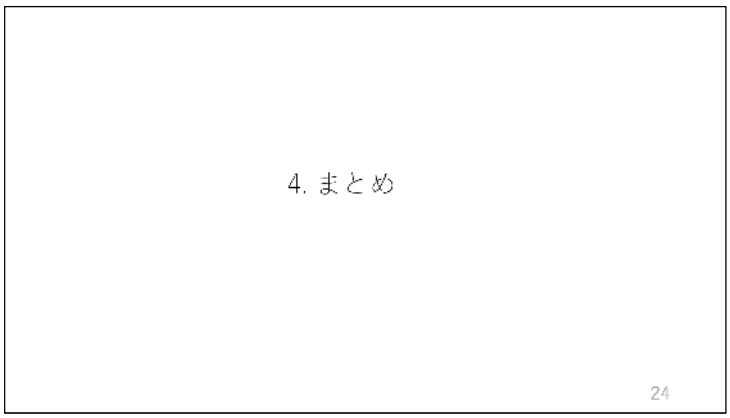


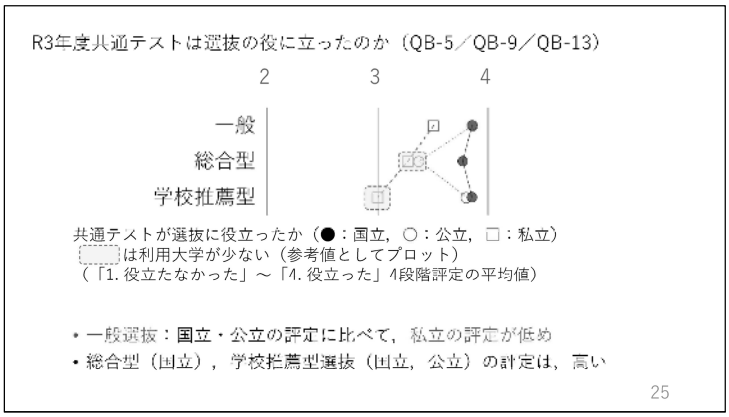
総合型および学校推薦型における共通テストの日程、難易度・識別力の適切さに関しても、

一般選抜と同じ項目について評定してもらっているのですが、スライドの上に示す 2 つのグラフが、(a)(b)(d)(e)の 4 項目に関して設置形態別に 4 段階評定の平均値をプロットしたものです。総合型が左、学校推薦型が右のグラフです。利用大学が少ないところの値も参考値としてプロットしています。

総合型についても学校推薦型についても、「(a)試験の実施日程の適切さ」と「(b)成績の提供日程の適切さ」に関しては、国立大学で、他の項目に比べて評定の平均値が低くなっています。これら 2 つの項目は一般選抜でも国立大学の評価は低かったのですが、それよりもさらに低い値となっています。

スライドの下のグラフは、「(c)自大学の受験生にとっての試験問題の難易度」に関して、5 段階で回答してもらった割合を示すものですが、利用大学の少ないところは、割合は参考と思ってください。「どちらともいえない」が大部分を占めるという点は一般選抜と同じですが、国立で「やや難しい」という回答が 7.7%あります。一般選抜で「やや難しい」という回答は国立では 1.3%だったのですが、それに比べると少し割合が高くなっています。学校推薦型でも、国立では「やや難しい」と「難しい」を合わせると 8.9%になっていまして、一般選抜よりも「難しい」という側に回答がやや寄っています。

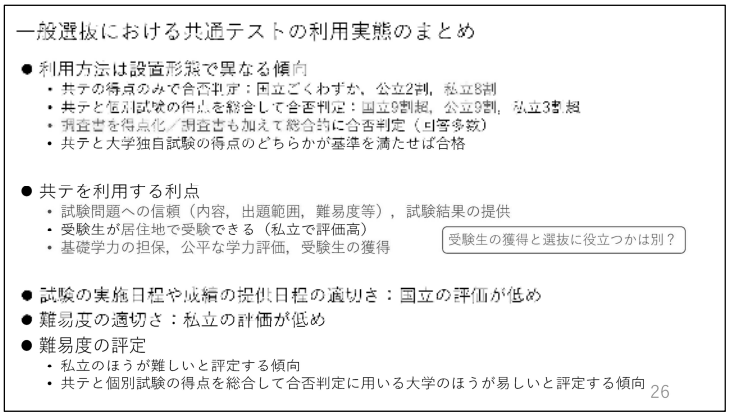




まとめに入ります。ここで「令和 3 年度共通テストは選抜の役に立ったのか」という質問

に関して、設置形態別に一般選抜、総合型選抜、学校推薦型選抜のそれぞれの 4 段階の評定の平均値をプロットしたグラフをお示しします。利用大学が少ないところは、参考値であることを示すために枠で囲んでいます。

一般選抜では、国立・公立に比べて、私立の評定が低めとなっています。総合型における国立、そして学校推薦型における国立と私立は、ある程度の数の大学が共通テストを利用してくださっているわけですが、共通テストが役立ったという評価が高くなっています。オレンジで囲んだところは参考値ではありますが、先ほどの自由記述を見ますと、選抜には使ってないが、共通テストの受験を要件とするというような回答も多く見られましたので、そういったことも反映されてこの数値なのかなと考えています。

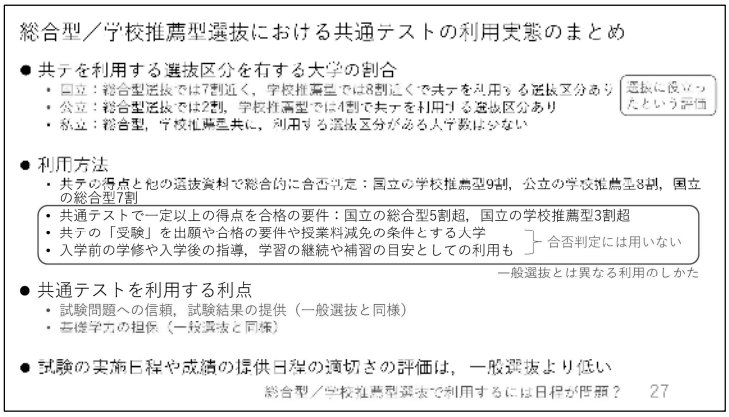


こちらは一般選抜における共通テストの利用実態をまとめたものです。共通テストの利用方法は設置形態で異なる傾向ですが、自由記述では共通テストや個別試験の得点に調査書を得点化したり、あるいは調査書も加えて総合的に合否判定するという利用方法が多くの国公私立大学から回答されました。また、1 大学のみですが、共通テストと大学独自の試験のどちらかが基準を満たせば合格とするという回答もありました。

共通テストを利用する利点としては、試験問題が信頼できること、選抜に必要な試験結果の情報が提供されることの評定が、国立・公立・私立問わず高いものでした。私立では、受験生が居住地で受験できる点の評価が高めでした。自由記述では、基礎学力の担保や公平な学力評価ができる点や、幅広い受験生の獲得への言及が見られました。ただ、先ほどのスライドで示したように、共通テストが選抜に役立ったかという質問項目に関しては、私立大学の評価は国公立大学よりも平均値が低かったです。そうすると、共通テストが受験生の獲得につながるという利点の評価は、選抜に役立つかという評価とは少し別なのかなと考えているところであります。

日程の適切さについては、国立大学の評価が低めでした。難易度の適切さについては、私立大学の評価が低めで、自大学の受験生にとっての試験問題の難易度については、私立大学のほうがやや難しいと評定する傾向でした。また、共通テストと個別試験の得点を総合して合否判定に用いるという利用方法を使う大学のほうが、易しいと評定する傾向でありまし

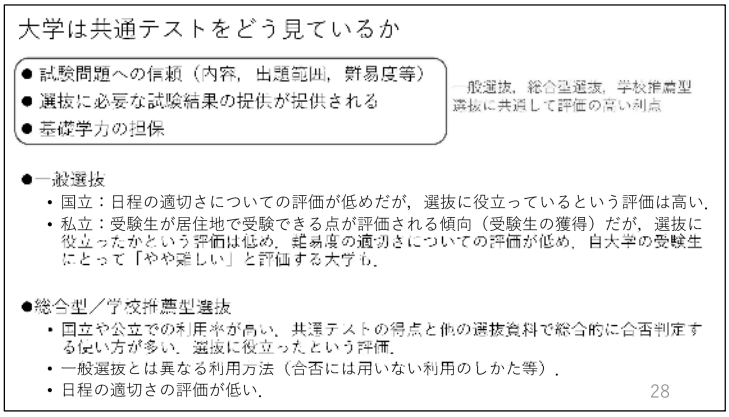
た。



こちらのスライドは、総合型および学校推薦型選抜における共通テストの利用実態のまとめとなります。共通テストを利用する選抜区分を有する大学の割合が高いのは国立の総合型選抜、国立の学校推薦型、公立の学校推薦型選抜です。それらからは共通テストが選抜に役立ったという評価が得られています。私立大学の総合型、学校推薦型で共通テストを利用する選抜区分があるよという大学は非常に少ないものでした。

一般選抜とは異なる利用方法として、合否判定には用いない利用の仕方がかなり自由記述で見られました。共通テストの受験を出願や合格の要件としたり、授業料減免の条件とするといった大学が見られます。また、入学前の学習や入学後の指導などに使うという回答もありました。

あと、試験の実施日程や提供日程の適切さに関しては、一般選抜よりも少し低くなっていて、総合型、学校推薦型で共通テストを利用する際に、日程というのが障壁の一つになっているということが示唆されます。



以上の結果に基づいて、大学は共通テストをどう見ているかという点をまとめたいと思います。試験問題への信頼や選抜に必要な情報の提供や基礎学力の担保というのは、一般選抜、総合型選抜、学校推薦型選抜に共通して評価の高い利点であることが示されました。一

般選抜に関しては、国立では日程の適切さについての評価は低めですが、選抜に役立っているという評価は高いものです。私立では、居住地で受験者が受験できるという点も評価される傾向ですが、選抜に役立ったかという評価や難易度の適切さについての評価は国公立よりも低めであります。

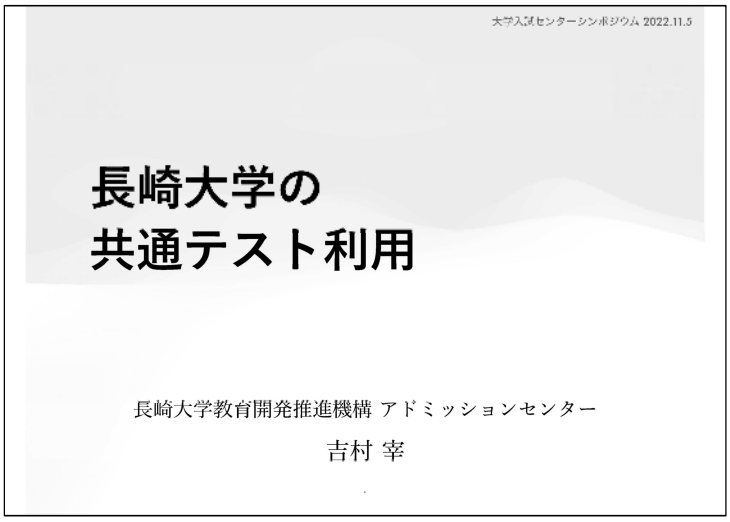
総合型、学校推薦型での共通テストは、国立や公立での利用率が高く、共通テストの得点と他の選抜資料で総合的に合否判定という使い方が多くされています。選抜に役立ったという評価も得られています。一般選抜とは異なる利用方法として、合否判定には用いずに受験自体を出願や合格の要件とするという利用の仕方が回答されています。日程の適切さについての評価は低めでして、共通テストを利用する際の障壁になっていることがうかがえます。

私の発表は以上となります。ご清聴ありがとうございました。

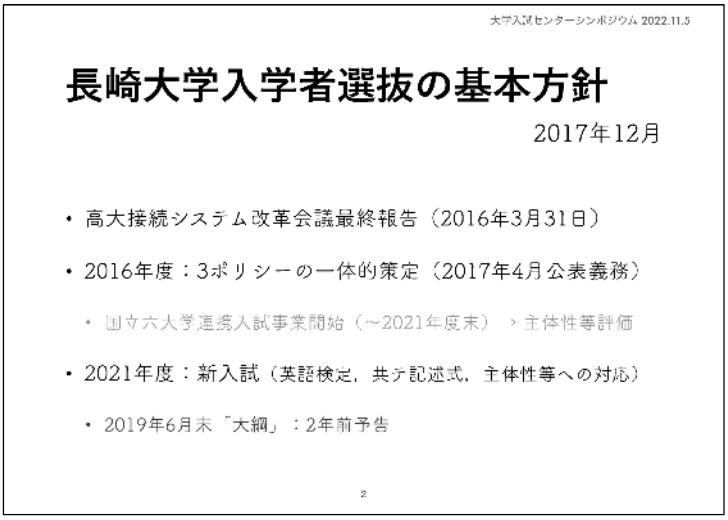
■ 事例紹介 1

長崎大学の共通テスト利用

吉村 宰（長崎大学教育開発推進機構アドミッションセンター教授）



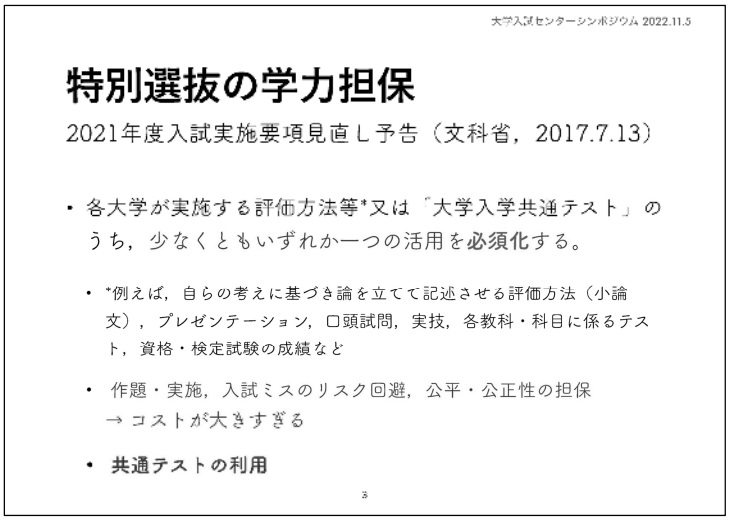
【吉村】　それでは、報告させていただきます。長崎大学の吉村と申します。よろしくお願いします。長崎大学の特別選抜での共通テスト利用として聞いていただければと思います。



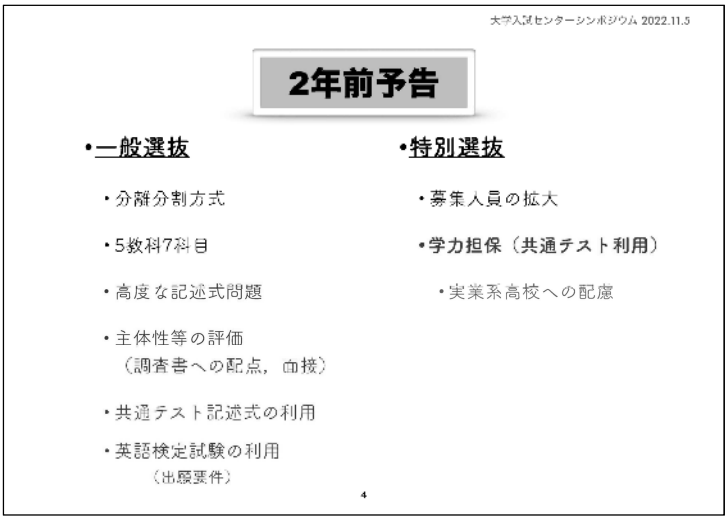
まず、背景ですが、2017 年の 12 月に本学の 2021 年度からの入学者選抜の基本方針というものを策定しました。これは 2016 年の高大接続システム改革会議最終報告を受けて、

2017 年 4 月から学長ワーキングの下、完全なトップダウンで行われました。最初の 2016 年度は、2017 年 4 月に公表しなければいけないということもあり、まずは 3 つのポリシーを一体的に策定するというところに全ての力を注ぎ込んでいました。同時に国立六大学連携入試事業という 2016 年度から 2021 年度末までの 6 年間のプロジェクトが始まって、この中で主体性等の評価が検討されました。

2021 年度からの入試ですが、実際は 2 年前予告です。この期限までに、つまり基本方針ができてからおよそ 1 年と少しで具体像を受験生に示さないといけないという事情がありました。



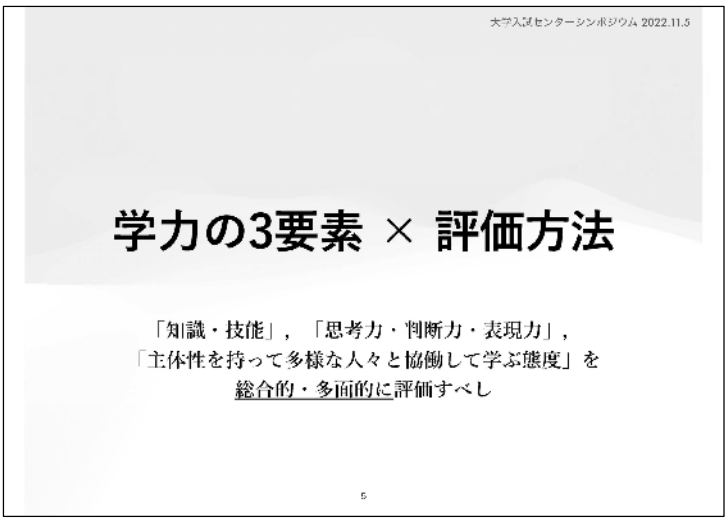
その中で、基本方針が固まるまでに入試実施要項見直しの予告が文科省から 7 月 13 日に出ました。そこで特別選抜については、学力担保として「各大学が実施する評価方法等又は『大学入学共通テスト』のうち、少なくともいずれか一つの活用を必須化する」と書いてありました。基本方針を定めようとしている中で、各大学が実施する評価方法についての例が書いてあったのですが、それらを実際に各学部で考えてできるのかということを考えると、作題・実施、入試ミス、これが一番怖いところですが、あと、資格・検定の成績を比較することにも公平・公正性の担保の問題が伴います。とにかくいろいろとコストが大きすぎるということで、一番間違いないのは共通テストを利用するということであり、それがやはり動機の一つだと考えていただければと思います。



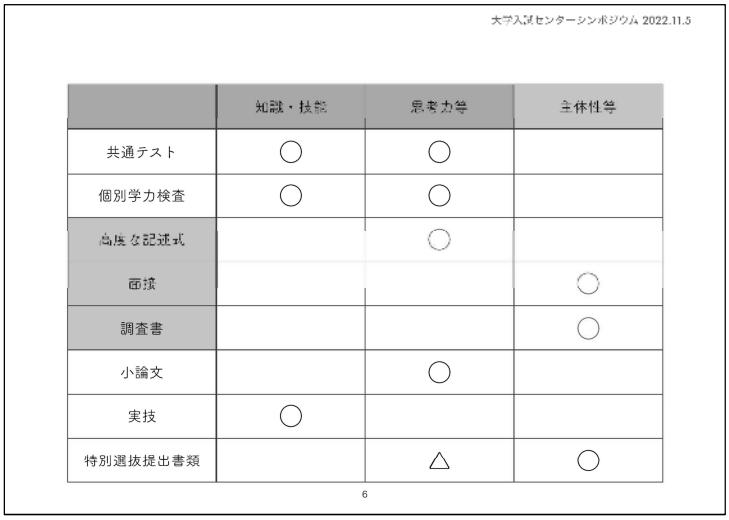
2 年前予告としてこういったものを出しました。分離分割、前期・後期、5 教科 7 科目、これは国大協で決まったものです。長崎大学としては、これも改革会議最終報告書で触れられていましたが、高度な記述式問題を作りました。こうですという回答だけを求めるのではなく、なぜそうなったかというところを問うような問題を出すことにしました。主体性等の評価については調査書へ配点すること、そして、全ての入試区分において面接を課すということを決めました。実施面で面接が不可能な学部等においては、それに代わる筆記試験を行うということにしました。あと、当時予定されていた共通テストの記述式は利用し、英語検定試験、これも出願要件として利用するということにしました。

特別選抜の学力担保のところは共通テストを利用し、ただし、実業系高校へは配慮を行うこととし、共通テストを課さないということにしました。

実際のところ、共通テスト記述式とか英語検定の利用がなくなって、ここまでの苦労は何だったんだと思いながらも、混乱は最小限に防げたという気もいたします。



高大接続システム改革会議の中では、結局学力の 3 要素を入学者選抜でちゃんと評価しなさいというところがポイントでした。それは知識・技能の側面、思考力・判断力・表現力の側面、主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度の側面、これらを総合的・多面的に評価すべしと、これが命題だったわけです。この「主体性を持って…」というところを、われわれは「主体性等」というふうに称しているわけですが、これら 3 つの要素と評価手法との対応を表すのがこの表です。



	知識・技能	思考力等	主体性等
共通テスト	○	○	
個別学力検査	○	○	
高度な記述式		○	
面接			○
調査書			○
小論文		○	
実技	○		
特別選抜提出書類		△	○

まず、共通テスト。これは知識・技能と思考力にかかるものと考え位置付けています。個別学力検査も知識・技能と思考力にかかるものと位置付けています。高度な記述式は、思考力に焦点を当てたもの、面接、調査書では、主体性等の部分を評価するものと位置づけています。

それ以外のところは従来からあるとおり、小論文や実技。特別選抜の提出書類により主体性等のところを見てみたり、あと、三角で表記していますが、思考力等を評価する手法だとも位置付けています。

	共通テスト	個別試験	高度な記述式	面接	調査書	書類	小論文 総合問題
前期	○	○	○	○	○		
後期	○	○*		○	○		○*
総合型 I				○	○	○	○
総合型 II	○			○	○	○	△
学校推薦型 I				○	○	○	○
学校推薦型 II	○			○	○	○	△

8

こうした評価方法を入試区分ごとに見てみます。まず一般選抜前期に、共通テスト、高度な記述式を含む個別学力検査、面接等による主体性等の評価、これで学力の 3 要素といわれるところを評価することになっています。ちなみに、面接・調査による主体性等の評価は全入試区分に入っています。

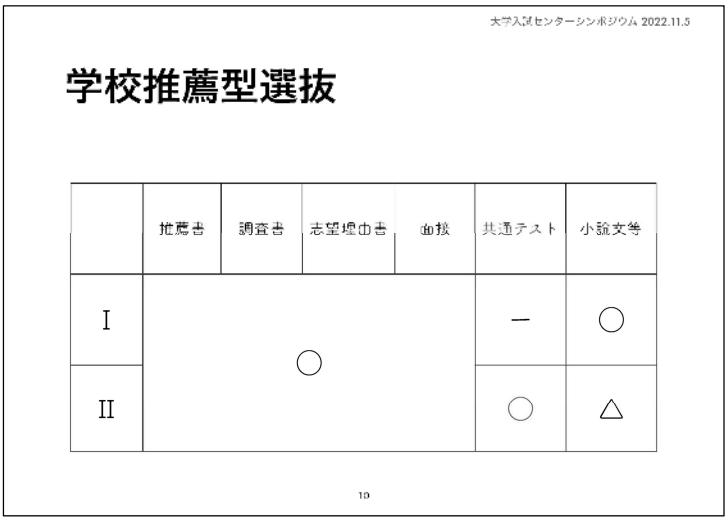
システム改革会議をそのまま真に受けてというのもおかしいですが、実は、長崎大学には特殊な事情があり、当時の学長が国大協の入試委員長で、その大学が国の方針を無視するわけにはいかず、やはり率先して真面目にやらないといけないという背景もご理解いただければと思います。

後期では、共通テストはもともと入っています。個別試験は、これは学部別に作っており、教科科目に関する試験や小論文や総合問題が出題されています。

総合型選抜

	1次選考（書類審査）			2次選考		
	自己推薦書	諸活動の記録	調査書	共通テスト	小テスト 小論文等	面接
I	○			ー	○	○
II				○	△	○

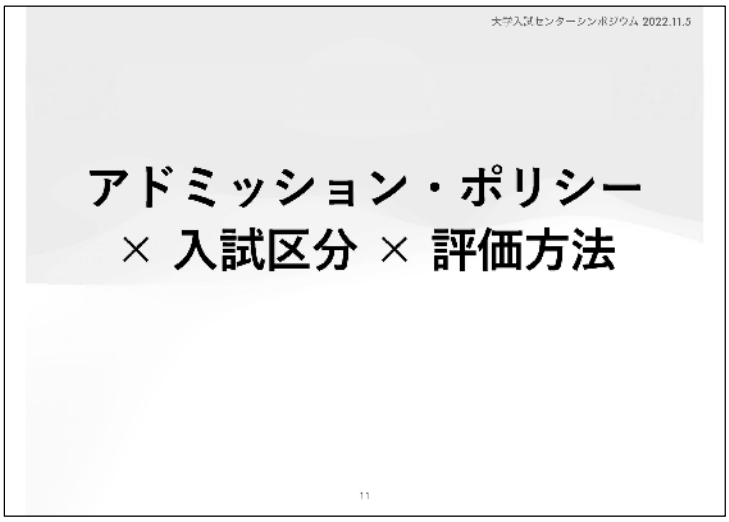
9

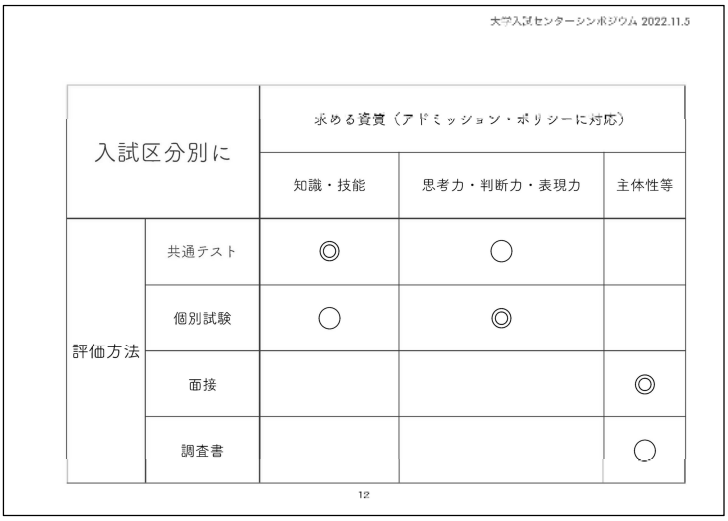


総合型と学校推薦型Ⅰ とⅡですが、Ⅰが共通テストを課さないものであり、基本的には実業系高校を対象としています。Ⅱというのが共通テストを課すものであり、基本的には普通科を対象としています。従来、総合型Ⅰ、学校推薦型Ⅰにも普通科から出願できたのですが、2021 年度の入試から、原則普通科は出願できないということになりました。一部学部、コース、あるいは学科でその原則から外れているところもありますが、ほぼ全ての学部・学科・コースで普通科の受験生には共通テストを課しています。

総合型選抜と学校推薦型選抜の違いですが、総合型選抜では 1 次選考と 2 次選考があって、Ⅱの場合に共通テストを課します。三角が付けてあるところは、共通テストを課してさらに小論文を課したりするところです。

学校推薦型選抜のⅡでも同じように、共通テストを課して、さらに小論文等を課すところもあります。



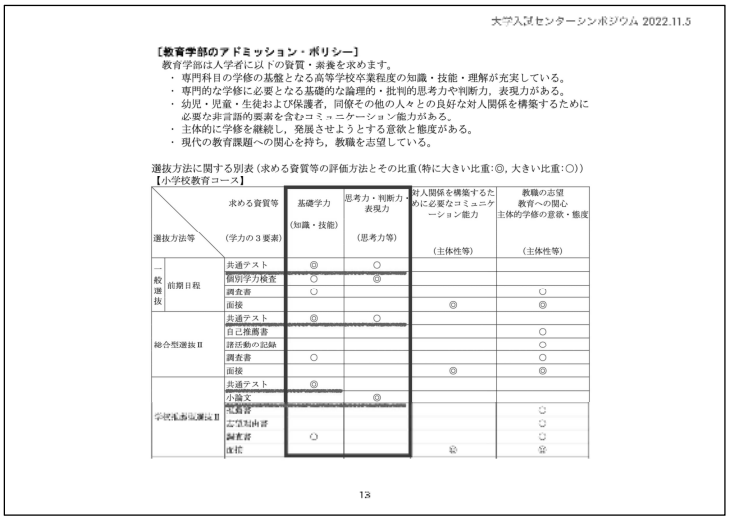


大学入試センターシンポジウム 2022.11.5

入試区分別に		求める資質（アドミッション・ポリシーに対応）		
		知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体性等
評価方法	共通テスト	◎	○	
	個別試験	○	◎	
	面接			◎
	調査書			○

12

この表には、入試区分別に求める資質、つまりアドミッション・ポリシーの 3 つの学力要素に対応するものと評価方法すなわち共通テスト、個別試験、面接、調査書などの対応が書かれています。



大学入試センターシンポジウム 2022.11.5

【教育学部のアドミッション・ポリシー】

教育学部は人学者に以下の資質・素養を求めます。

- 専門科目の学修の基盤となる高等学校卒業程度の知識・技能・理解が充実している。
- 専門的な学修に必要となる基礎的な論理的・批判的思考力や判断力，表現力がある。
- 幼児・児童・生徒および保護者，同僚その他の人々との良好な対人関係を構築するために必要な非言語的要素を含むコミュニケーション能力がある。
- 主体的に学修を継続し，発展させようとする意欲と態度がある。
- 現代の教育課題への関心を持ち，教職を志望している。

選抜方法に関する別表（求める資質等の評価方法とその比重(特に大きい比重:◎, 大きい比重:○)）

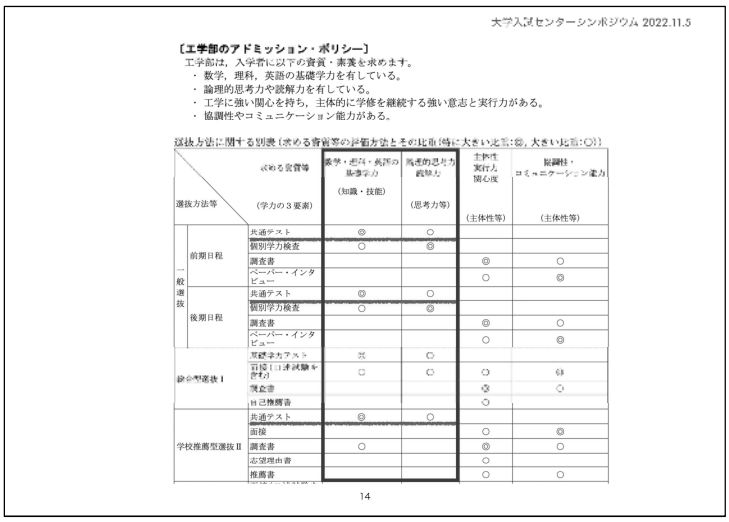
【小学校教育コース】

選抜方法等		求める資質等（学力の３要素）	基礎学力（知識・技能）	思考力・判断力・表現力（思考力等）	対人関係を構築するために必要なコミュニケーション能力（主体性等）	教職の志望 教育への関心 主体的学修の意欲・態度（主体性等）
一般選抜	前期日程	共通テスト	◎	○		
		個別学力検査	○	◎		
		調査書	○			○
		面接			◎	◎
総合型選抜Ⅱ		共通テスト	◎	○		
		自己推薦書				○
		諸活動の記録				○
		調査書	○			○
		面接			◎	◎
学校推薦型選抜Ⅱ		共通テスト	◎			
		小論文		◎		
		調査書				○
		志望理由書				○
		調査書	○			○
		面接			◎	◎

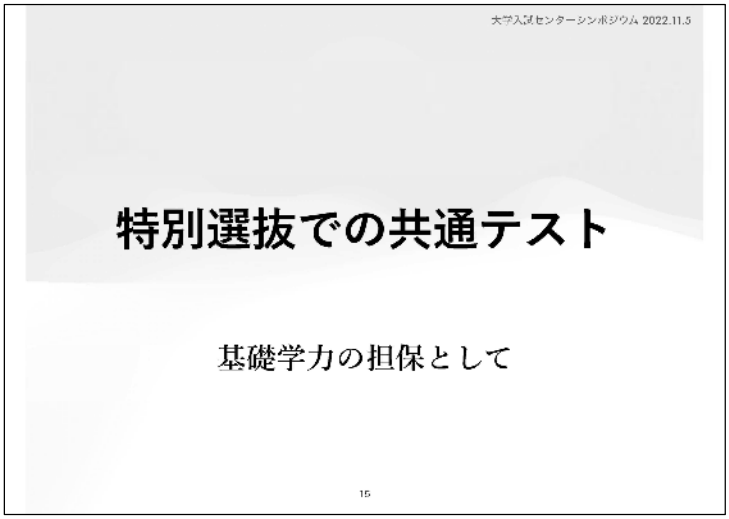
13

大綱にはこのようにアドミッション・ポリシーおよびそれに対応する学力要素が書かれています。ここに示した教育学部のアドミッション・ポリシーでは、上から 2 つ、これがいわゆる基礎学力や思考力・判断力・表現力で、その下の部分は主体性等の対応する能力・態度です。教育学部では後期日程はないのですが、一般選抜前期、総合型のⅡ、学校推薦型のⅡ、それぞれ基礎学力のところの共通テストに二重丸がついています。特に大きい比重をおいていますという意味です。表では特に大きく比重をおくものに二重丸、大きい比重をおくものに丸がつけられています。共通テストは、思考力等のところにも丸がついています。個別学力検査では、思考力に二重丸、基礎学力に一重丸がついています。総合型は、基礎学力で共通テストに二重丸、基礎学力に一重丸、一般選抜前期と同じですね。学校推薦では基礎

学力で共通テストに二重丸、思考力等で小論文に二重丸がついています。全ての主体性では面接に二重丸がつけられています。



これは工学部なのですが、一般選抜前期後期、学校推薦型 II ともに共通テストの位置付けは、基礎学力に二重丸、思考力等に一重丸となっています。総合型 I では、基礎学力テストが課されそこで基礎学力に二重丸がついています。



大学入試センターシンポジウム 2022.11.5

入試区分	学部	指定教科科目	科目数*	国語	社会	数学	理科	外国語
総合 II	教育	5-6/6-6	6	1	1 or 2	1	1 or 2	1
	経済	5-6/6-6	2	高得点2教科科目(25点満点換算)				
	歯学	5-7	7	1	1	2	2	1
推薦 II	教育	コースによって様々：1-1，2-2，3-4/4-4，5-6/6-6，5-7/5-8						
	医学科	5-7	7	1	1	2	2	1
	保健学科	4-5/4-6	5	1		2	1	1
	歯学	5-7	7	1	1	2	2	1
	薬学・薬科	3-5	5			2	2	1
	情報	3-4	4			2	1	1
	工学	2-4	4			2	2	
	環境	5-6/5-7	6	1	1	2	1	1
	環境(実)	2教科科目以上	2	高得点2教科科目(100点満点換算)				
	水産	5-7/5-8	7	1	1	2	2	1

*科目数：基礎を付した科目は2科目で1科目とする　16

結局、共通テストは基礎学力を担保するという意味で課しているのですが、どういう課し方をしているかといいますと、ここに示したように結構科目数が多いのです。基礎の付されているものは 2 つで 1 つです。経済と環境で 2 科目というのは少ないのですが、環境の 2 科目というのは実業系高校にまで共通テストを課しているわけで、実際に少ないのは任意の 2 科目とする経済だけです。情報、工学は最低限必要な科目を課しています。情報は数理と外国語、工学は数理です。それ以外の学部・学科・コースでは結構の数、ほぼすべての科目を課しています。

大学入試センターシンポジウム 2022.11.5

得点率による足切り（原則として）

入試区分	学部	科目数*	得点率	備考
総合 II	教育	6	－	
	経済	2	－	
	歯学	7	70%	共テ
推薦 II	教育	－	60%	(共テ＋面接) or 面接20%
	医学科	7	75%	共テ
	保健学科	5	－	
	歯学	7	70%	共テ
	薬学科	5	80%	共テ
	薬科学科	5	70%	共テ
	情報	4	60%	共テ
	工学	4	60%	共テ＋面接
	環境	6	60%	(共テ＋面接) or 面接50点(75点中)
	環境(実)	2	60%	(共テ＋面接) or 共テ科目最高点
	水産	7	－	

*科目数：基礎を付した科目は2科目で1科目とする　17

かつ得点率です。受ければいいというわけではなくて、これだけの得点に満たない場合は原則として不合格とするということになっています。共通テストと面接の組合せの得点率や、面接の得点率が基準を下回ることによる不合格もあります。

大学入試センターシンポジウム 2022.11.5

特別選抜の学力担保と募集人員の変更

	2020年度	2021年度
後期日程	239	204
課さない総合	82	58
課さない推薦	103	25
課す総合	27	14
課す推薦	82	190

18

共通テストを課すことで2020年度と2021年度で募集人員が大きく変化するわけですが、課す推薦が82から190。課さない推薦が一気に25まで減っています。

大学入試センターシンポジウム 2022.11.5

まとめとして

課す特別選抜の効能

- 学力検査回避の受験生を退ける（入学者の学力担保 vs 志願者減）
- 入学者選抜の多様化に関する努力目標（一般後期→特別選抜）
- 高校側からの評判
  - 早期に合否が決まらないので邪魔にならない
  - 志望が強い生徒が出願する
  - 後期と変わらないのでは？
- 後期入学の学生とは異なる特徴
  - 入学時意識調査の基礎的・汎用的能力に関わる質問で好ましい傾向が見られる

19

まとめとして、共通テストを課す特別選抜の効能としまして、まず学力検査回避の受験生を退ける、入学者の学力担保を期待できることがあります。実際出願してくる高校が完全に変わりました。これまで推薦に出してきた高校が課すと出してこなくなりました。課さなければたくさん来るのですが、課すといなくなる高校というのが幾つもあります。一方で、志願者は大きく減ります。入学者の学力担保を取るか、志願者増を取るかという悩ましいところもあります。特別選抜に後期から振り分けたっていうところもありますので、一応入学者選抜の多様化に関する努力目標のところも達成したのかなと思います。

いろいろ高校もヒアリングしているのですが、早期に合否が決まらないので学習指導の邪魔にならないというような声を聞きます。ただ、生徒や保護者は早く決まってほしいので、

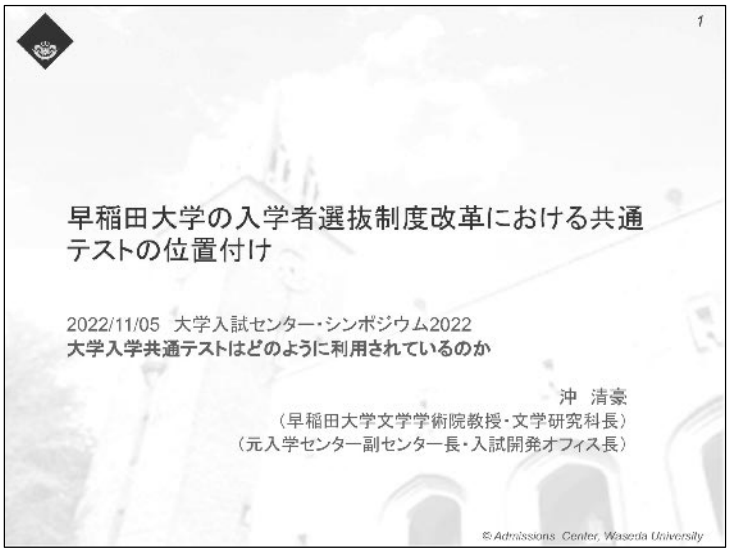
そこのところの生徒や保護者にとっては好ましくないものとなっている。共通テストを課してもさらに推薦で出してくるという、そういう生徒は志望が強く、そういう生徒でなければ学校の先生もあまり押さず。志望が強い生徒がいるとすれば、それは背中を押すこともあるという話でした。

高校教諭からは後期と変わらないのではないかという意見もありましたが、入学後の意識調査で基礎的・汎用（はんよう）的能力に関わる質問で、入学者として好ましい傾向も見られ、後期入学の学生とはやはり異なる特徴があります。私からは以上です。

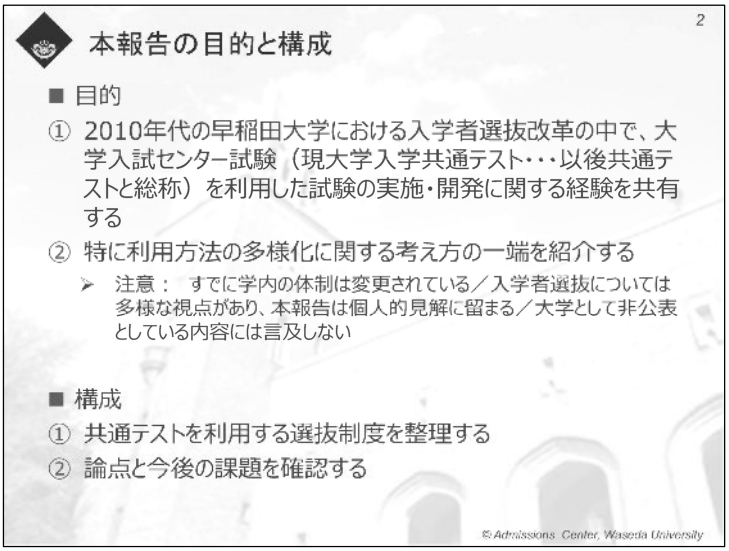
■ 事例紹介 2

早稲田大学の入学者選抜制度改革における共通テストの位置付け

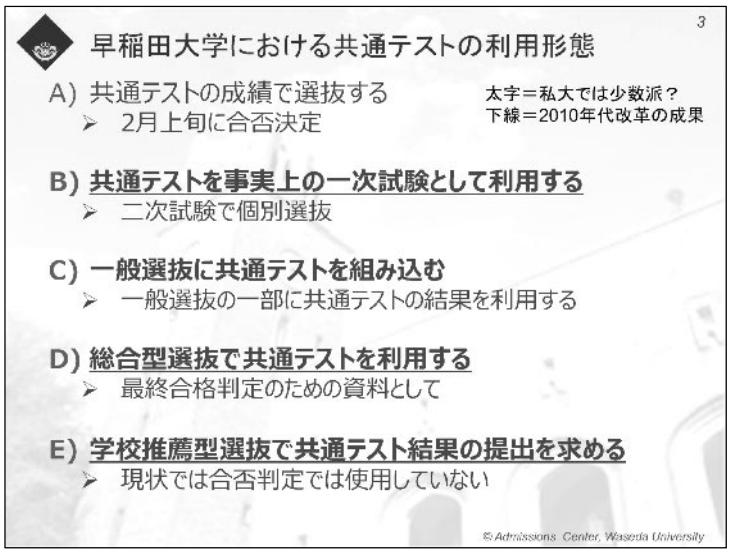
沖 清豪（早稲田大学文学学術院教授・文学研究科長）



【沖】　皆さま、よろしくお願いいたします。早稲田大学の沖と申します。今回、このような形で本学の共通テストの利用について、私がご報告するということになりましたのは、現在、私自身は入学センターから離れていますが、2010 年代、改革の議論を進めるに当たりまして、その当時に入学センターで直接の担当をしていたということでお引き受けした次第です。



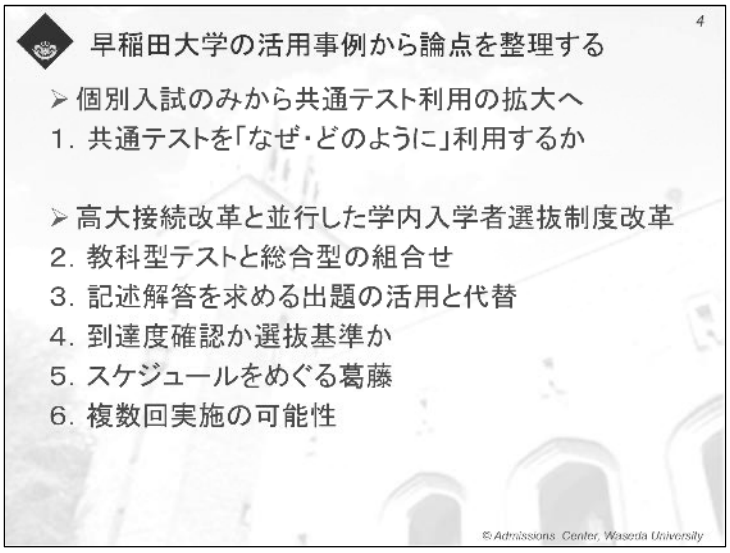
本日の私のお話の目的そのものは、2 つのことを紹介するということになります。構成を 2 点挙げていますが、そのうちの 1 つでは本学における共通テストを利用している選抜制度について、大学が 13 学部と大きく、実際には 13 大学の連合体のような形になっているということから、非常に多様な使い方をしているような気がいたしますので、その辺りについてできるだけ分かりやすく整理をしたいというふうに思います。その上で、早稲田に限らず私立大学の立場から、この問題についての論点あるいは今後の課題というものを最後に触れられれば良いと思っています。



さて、具体的な内容ですが、今スライドに A から E まで共通テストの利用形態についてご紹介しています。具体的にはこの後それぞれ簡単にご説明することになりますが、いわゆるわれわれが「のみ入試」と呼んでいる A のように、共通テストの利用、成績だけで選抜を

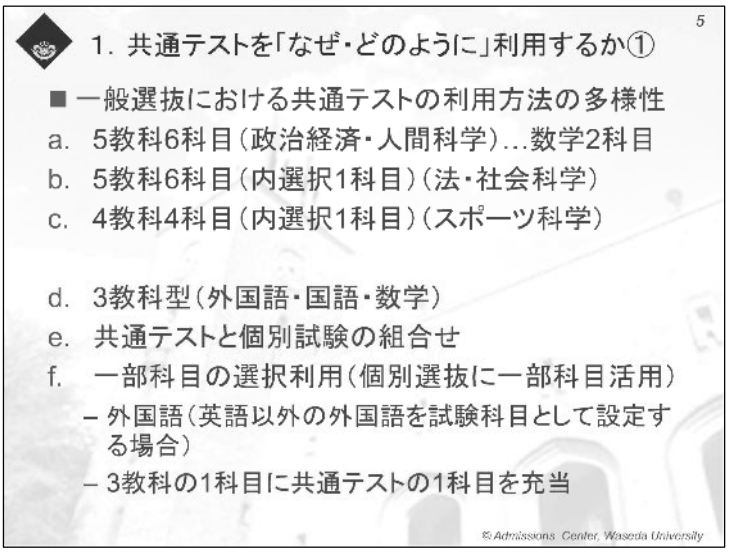
するというようなものもあれば、B のように二つの試験の一つとして扱う場合もあります。スライドでは事実上の 1 次試験と書いてしまいましたが、これは 1 次試験と 2 次試験を合わせて一般選抜というふうに使っているということで、実際に 1 次の試験で何らかの選抜を行って 2 次試験の受験者を絞ることはしていません。若干ニュアンスが国立大と違うという点は少し私も忘れていまして、誤解を招く表現になっていまして失礼いたしました。

一方で、あまり見られないと思われるのが、一般選抜がもともと行われている中のごく一部に共通テストを組み込むという C のような使い方を、従来から行っています。さらに、今回の改革の中で D のように総合型選抜に共通テストを利用するという例、あるいは E のように学校推薦型選抜で共通テストの結果の提出を求めるというようなことを導入したということで、今回私どもが事例紹介を担当することになったのではないかと考えています。



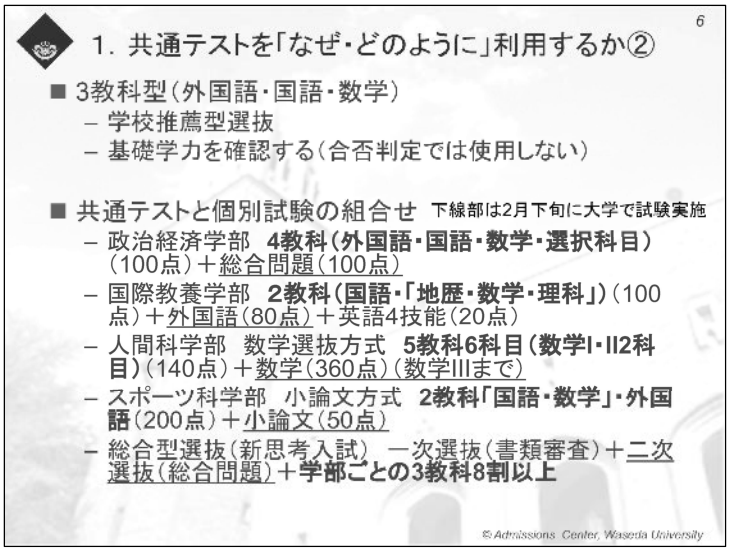
さて、具体的な活用事例を確認し、そこから論点を整理することにいたしますが、従来の 2 月の中・下旬に行っている、今も行っている個別入試だけではなくて、共通テストを利用するということですが、これはセンター試験の時からということになりますが、なぜ、どのように利用するのかということを後ほどまた改めて考えたいと思います。

一方で、2 から 6 に挙げていますのは、吉村先生もご紹介になりましたように、高大接続改革が横で走っている中で、その少し前からですが、大学内で入学者選抜制度について本格的に再検討しなければならないということで、いろいろな議論を進めてきた論点ということになります。



まず、一般選抜において、いわゆる共通テストのみで合否判定を行うというようなものについては、a.b.c.と挙げているとおり、5 教科 6 科目ないし 4 教科 4 科目で合否判定を行うというもので、2 月の上旬から中旬にかけて合格者発表ができるというタイプのものになります。

一方で、d.のように 3 教科型で外国語・国語・数学ＩＡという組合せの利用の仕方、また、特殊かもしれないと申し上げた、e.の共通テストと個別試験の組合せの中でもとりわけ f.に挙げているような一部科目を選択的に利用するというような形というものがあります。

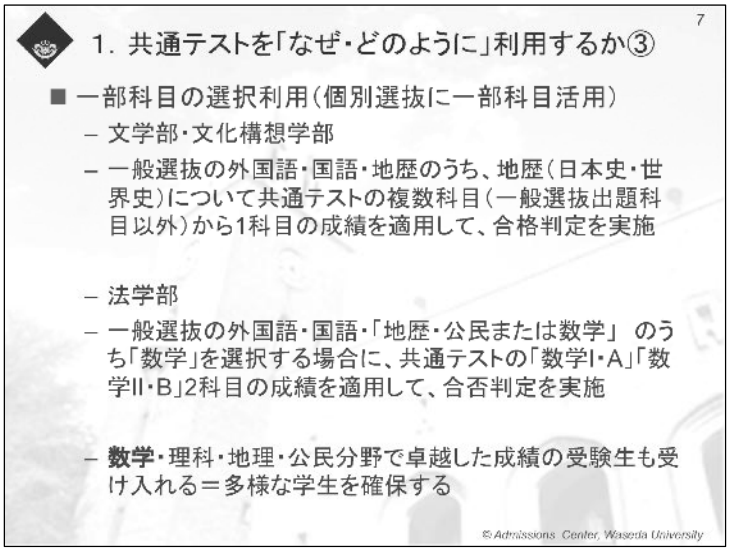


改めて d.以降の特徴というのを確認していただきますが、3 教科型は、実はこれが学校推薦型選抜で、基礎学力を確認するということを目的とした使用方法です。合否判定自体は 12 月ぐらいには多くの学部で終了しますので、共通テストを受ける前には合格が決まってい

ます。その後 1 月に受けていただき、その成績をご連絡いただくという形で利用をしています。

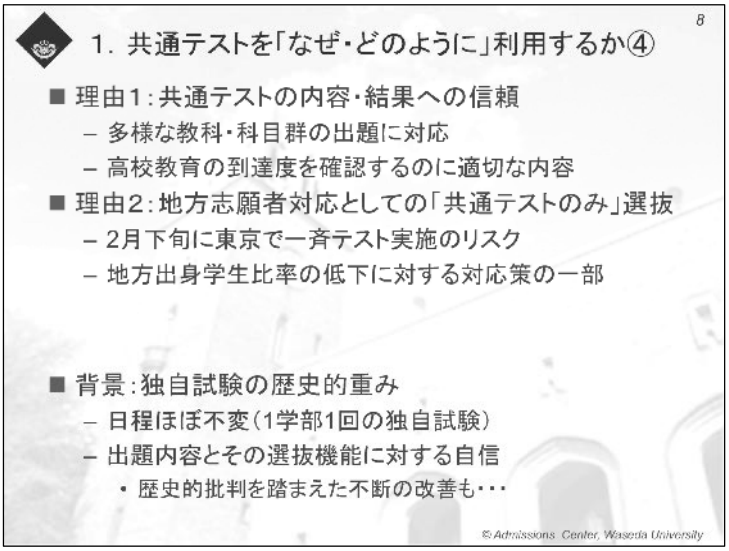
一方で、共通テストと個別試験の組合せということになりますが、これが先ほど 1 次、2 次という説明をしましたものです。政治経済学部、国際教養学部、人間科学部などでそれぞれ各学部によって本当に使い方がばらばらであるというのでかえって混乱を招いているかもしれませんが、教科型の学力を共通テストで見た上で、総合問題や外国語に特化し、あるいは、人間科学部のようにとにかく数学をきちんと個別の試験のほうで確認をするというようなパターンもありますし、スポーツ科学部は小論文という形で対応しているということになります。

また、この組合せの中では総合型選抜、新しく導入しました新思考入試というものですが、これは 2 次選抜で総合問題を出して、2 次合格のところまでは年内に決まるわけですが、その後、共通テストを受けていただき、学部ごとに設定されている 3 教科で 8 割以上の得点で最終合格という形になるというような使い方をしています。



また、一部科目の選択利用としましては、例えば文学部・文化構想学部では一般入試、個別入試の外国語・国語・地歴の部分の試験科目のうちの地歴に相当するところについて、共通テストの外国語・国語・地歴、日本史・世界史以外のものの 1 科目の成績を使って合否判定を別途行うという仕組みを入れています。また、法学部も地歴・公民または数学という 3 教科科目のところについて数学を選択する場合は、共通テストの 2 科目の成績で合否判定を行うという形で利用させていただいているということになっています。

以上のように、この 3 学部については数学が共通していますし、文学部・文化構想学部の場合には、理科・地理・公民分野で卓越した成績を取れるような受験生、多様な学生を採るということで利用しているということになると考えています。

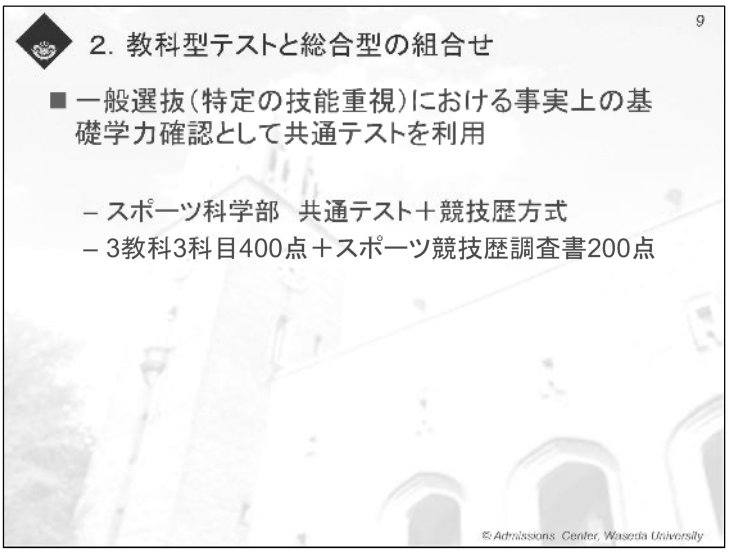


こうしたような多様な使い方になっているということの理由を少し考え直してみますと、共通テストの内容・結果については私ども自身が非常に信頼を置いているということになります。とりわけ、多様な教科・科目を 2 日間できちんと受験ができるというような作られ方、あるいは出題の内容も高校教育その時期その時期の学習指導要領の内容、あるいはそこで書かれている内容の到達度を確認するのに適切な内容なのではないかと見ているわけです。

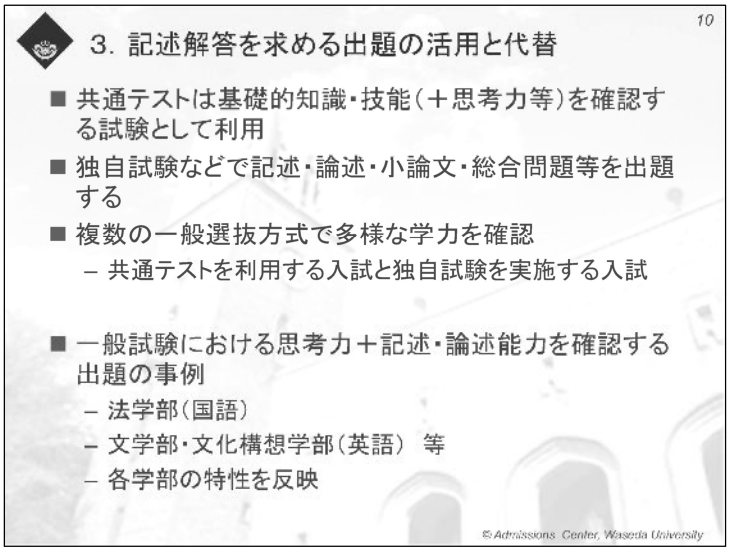
一方で、率直に申し上げれば、地方志願者の比率が非常に下がってきていたというのも早稲田の課題としてありましたので、この点についていかに対応するのかという点で言いますと、とりわけ、「のみ入試」の場合ですと、地元でそれぞれの高校生あるいは高校生以外も含めて受験をしていただくことができ、必ずしも入学者の枠そのものをたくさん用意するということにはしていませんが、少なくとも東京で一斉試験というようなことを避ける場合に、非常に有効な方法であるのではないかとも認識しているところです。

こうした考え方を取っているのは、やはり早稲田大学において 2 月の下旬に行っている独自試験というのが学内では非常に重視されており、日程もほとんど変わってきていませんし、1 学部 1 回限りというような形で進めているという点もご承知かと思います。

もちろん一方で、出題内容とか、あるいはそれの持っている識別力といったものについて、外部から一定の批判を受けているということは認識していまして、いろいろと改善を少しずつ図っているという状況になっています。



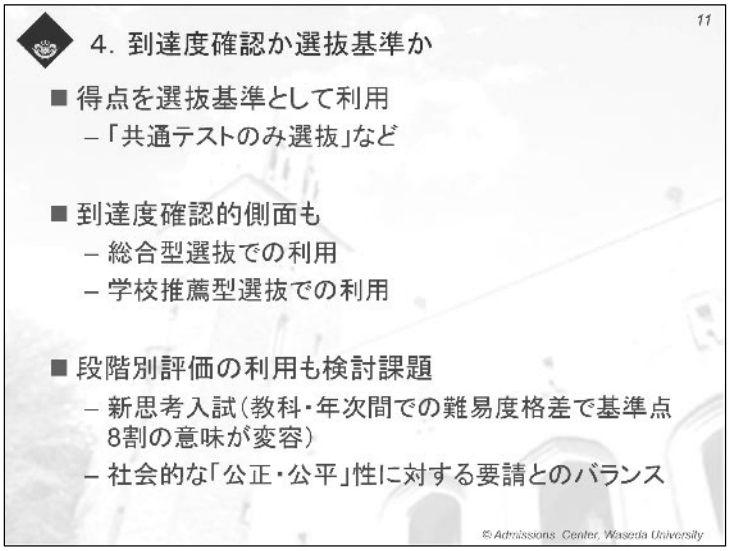
さて、こうしたもの以外にスポーツ科学部では、共通テストプラス調査書という選抜も実施しており、調査書は実際にはスポーツ競技歴を測るというような形で、これをスポーツ科学部では一般選抜というふうに位置付けていますが、外から見ると、もしかすると総合型に見えるのではないかというような試験制度も導入している状況です。



さらに、これは高大接続改革の議論との関係ということになりますが、共通テストで当初は記述を入れるということから、そこの辺りで測れる力があるのではないかと思っていましたが、今、考え方としては独自試験のほうの改革で記述・論述、あるいはその組合せの中で小論文や総合問題を出題することによって、表現力あるいは主体性などを見ていくということになるであろうということで、1つの選抜方式で全てを見るというのはなかなか難しく、複数の選抜方式を用意した上で、それぞれの領域で非常に優れた学生に来ていただきた

いというような形で選抜を行っています。

記述・論述についても各学部によって非常に特色のある出題をしていますので、もしお時間があるようでしたら、法学部の国語、あるいは文学部・文化構想学部の英語の問題などをご覧いただければと思う次第です。

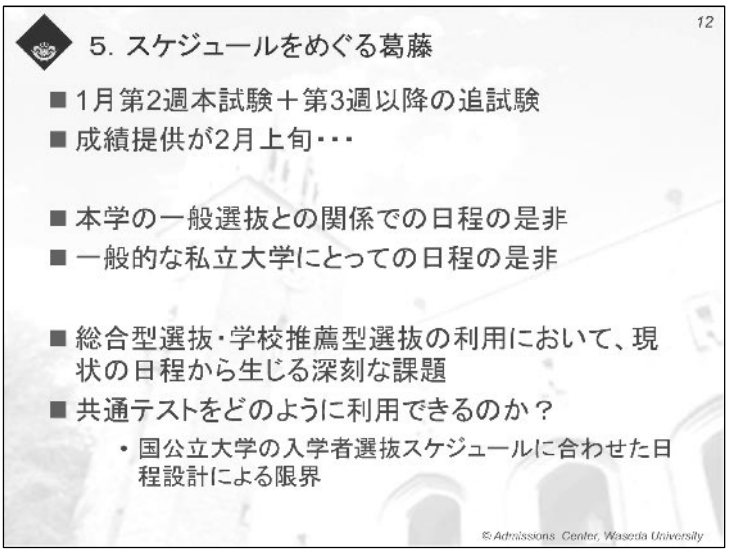


さて、この辺りから早稲田に限らず私立大学あるいは私立大学における共通テストの利用の在り方についてということの論点を幾つかご紹介していきたいと思います。

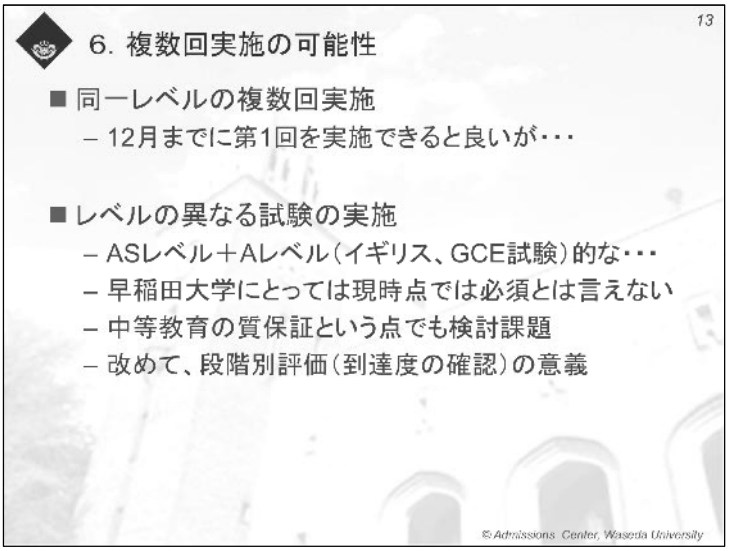
まず、やはり共通テストを到達度としての確認として見るのか、選抜のデータとして使うのかという点が論点になるかと思います。当然、得点として出てくるわけなので、選抜の基準として利用するということも起こりますが、一方で到達度については総合型選抜である新思考入試ですと 8 割を基準としていますし、学校推薦型の場合には到達度を見るというよりは学習の様子を見るというようなことで使っている状況になっています。

したがって、総合型あるいは学校推薦型も――これはすいません、ここから先は私見ということでご理解いただきたいのですが、特に今年の春の共通テストの場合に、総合型選抜で利用していた「数学ＩA」の平均点が相当低いというような事態が起こりました。そうしますと、8 割以上という設定というのが果たして妥当か、適正かというような問題が改めて出てくるということになります。

一方で、段階別の 9 段階の表示が果たして社会的に受容されるかどうかという点もわれわれとしては重視というか、非常に考慮しないといけないということで悩ましい状況に陥っているということは率直に認めなければならないかと思います。



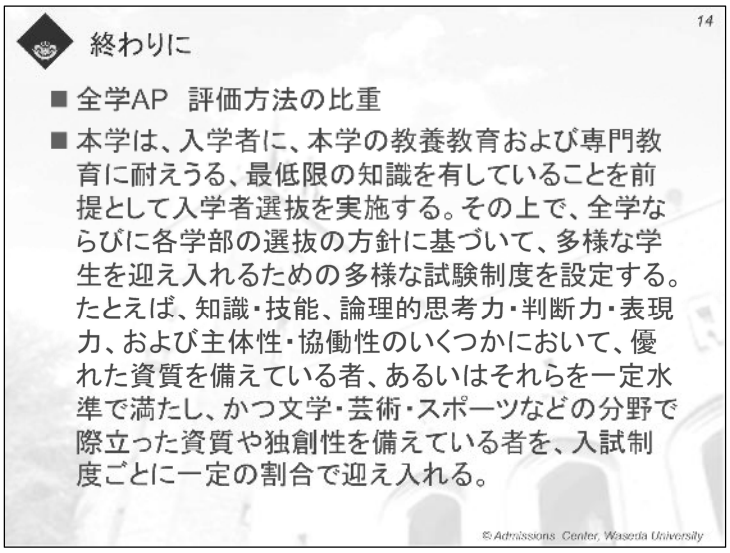
さて、先ほどからも出ていましたが、スケジュールの問題に対する葛藤というのが、私立大学は特に深刻になります。早稲田大学は、実際には 2 月の中旬・下旬に一般選抜、個別入試を行っているので、影響があまり大きくはないのですが、多くの私立大学が 2 月 1 日以降、学力選抜を行うわけなので、そうしますと成績提供が 2 月の上旬以降になってしまう共通テストとどのように組み合わせるか、とりわけ総合型あるいは学校推薦型の試験との組合せというのが日程的には非常に課題になるということで、共通テストを活用する制度の導入が難しいというのが率直なところになっています。



また、この問題をさらに先ほども出ていた難易度の問題と組み合わせますと、複数回実施、なかなかこれは非常に難しいというのがもう明らかになってきていますが、同一レベルの試験を複数回行えるかどうかという論点と同時に、レベルの異なる試験という、イギリスに

おける GCSE ないし AS レベルと A レベルのような考え方というのは果たして導入できないかというのも私立大学全体としては課題になるのではないかと思っています。

もちろん早稲田大学においては、今の共通テストのレベルで十分対応できているというふうに思っていますので、レベルの異なる試験を本学として必要だというふうには個人的に考えていませんが、一方で、中等教育の質保証という点でも、レベルの異なる試験、今の共通テスト、基礎力を測る、基礎学力を測るというには共通テストは難易度が高いのではないかということを私立大学全体としては認識しています。したがって、その辺りをどう考えるかというのが論点になるかと思いますし、改めてこの問題を考える場合に、特に到達度を見るということであれば、段階別評価というものをより積極的に考えていくということも必要かと思います。

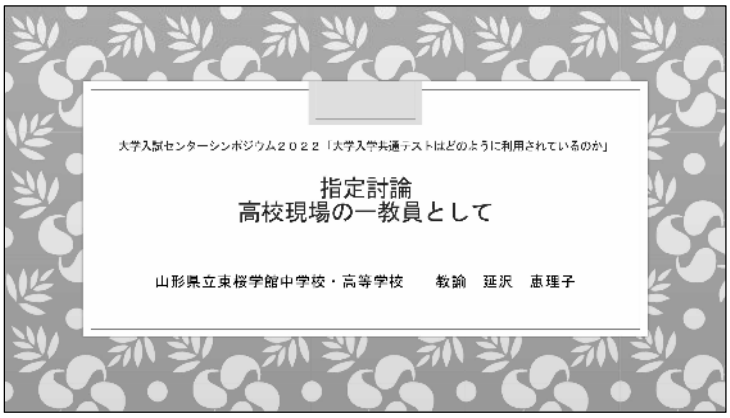


非常に雑ぱくな報告になっており恐縮ですが、本日、私どもの事例を紹介しましたのが、私どものところの全学のアドミッション・ポリシーで評価方法について言及しているところで、多様な学生を迎え入れるための多様な試験制度を設定するということが大学全体としてのポリシーとなっているということです。学部ごとにさまざまな入試制度を導入し、それぞれ力点を異なるところに置くことによって、できるだけ多様な選抜制度で多様な学生を日本全国から集めたいというのが本学の希望であります。そのような形が反映している入試制度を現在導入しているということでご理解いただければと思います。

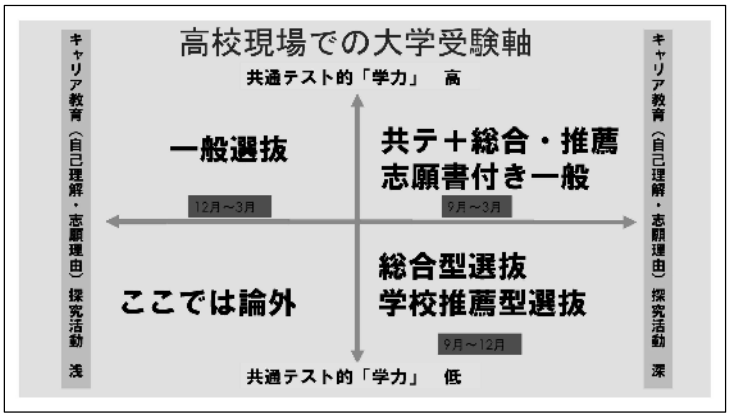
若干延びてしまいましたが、私の報告は以上となります。ありがとうございました。

■ 指定討論

延沢 恵理子（山形県立東桜学館中学校・高等学校教諭）



【延沢】　山形県立東桜学館中学校・高等学校の延沢と申します。現在、高校 3 年生の学年主任をしています。本日は地方公立進学校の一教員という立場からお話しさせていただきます。よろしくお願いいたします。



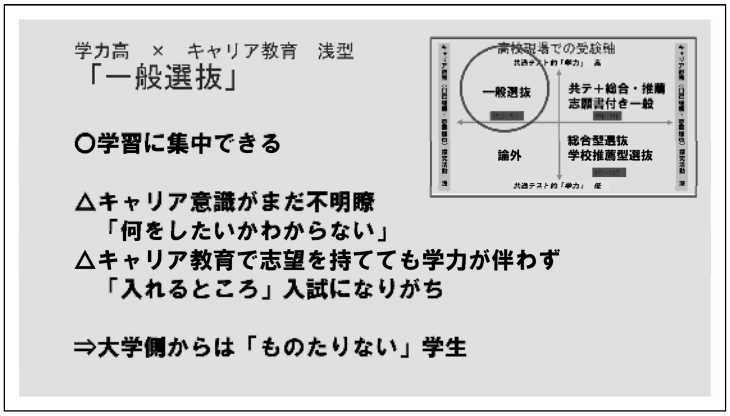
現在の高校現場での受験の軸を、共通テスト的な学力の高い低いを縦軸に、キャリア教育や探究活動の深い浅いを横軸にして整理してみますと、この図のようになるかなと思います。キャリア教育では、主に自己理解を進めて進路志望を耕していきます。学びのエンジンになる探究活動とも相性がいいので、探究もこちらの軸に入れさせていただきました。

学力が重視されて、キャリアの面は多少弱くても受けていける受験が一般選抜です。大体 1 月から 3 月に行われています。12 月と書いたのは、高等看護専門学校と併願する生徒たちがいるイメージがあるからです。進学校はここに注力してきたのかなというふうに思います。

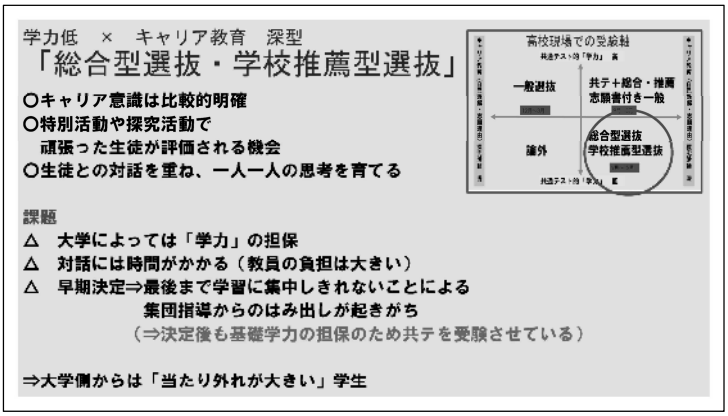
キャリアや探究の面での深さを求められて、共通テスト的な学力をあまり問われないと言うと言葉は悪いのですが、共通テスト以外の学力を問うと言ったほうがいいのでしょうか。そういう受験が総合型、学校推薦型選抜のイメージです。9 月に推薦会議を学校内で行って、全職員体制で指導を割り振って、出願書類や受験科目の指導に当たっていきます。受験自体は 11 月がピークで、12 月上旬くらいまでに結果が出ていきます。進路多様校ではこのタイプの受験を重視してきているふうに思います。

そして、学力が重視されてキャリアや探究も重視される理想形の入試が、右上の共通テストを課す総合型や学校推薦型選抜、あるいは志望理由書の提出を求める一般選抜ということになるように思います。私の経験では、9 月の推薦会議を経て 11 月や共通テストの後に受験をして、共通テストの成績と合わせて 2 月に合否結果を出すケースがあります。後期試験に志願書を課す大学もあるとすれば、3 月までの期間になるかなというふうに思います。

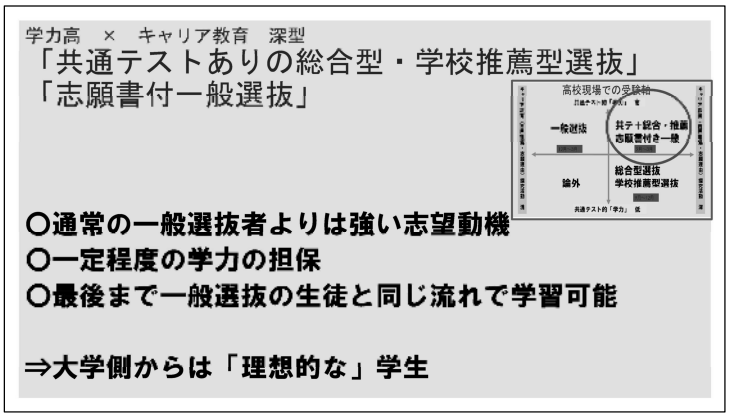
一番左下のどちらも低いというところに関しましては、ここでは論外だと思いますので省かせていただきます。



先ほどの 4 象限の図ですが、左上の一般選抜の良さというのは、何と言っても学習に集中できる点です。この入試は、キャリア意識がまだ不明瞭で自分が何をしたいのか決められない生徒たちの受け皿にもなっているというふうに思います。また、キャリア教育である程度やりたいことが見つかっても、学力がなかなか伴わない場合に「入れるところ」入試になっていきます。そのため、大学の先生方からは物足りないケースもあるかもしれないというふうに思います。



右下の総合型選抜や学校推薦型の選抜は、キャリア意識が比較的明確で、特別活動や探究活動で頑張った生徒が評価される機会になっています。ただ、自分の考えを志願理由書の形に表現するまでにはやはり対話で思考を深めていくことが必要というケースが多く、教員の負担は少なくありません。11 月や 12 月に合格が決まってしまうので、その後の授業に集中しきれないというようなケースもあり、最後まで伸びきれない生徒も出ます。大学によっては学力の担保が課題になるケースもあって、言葉は少し悪いのですが、大学側としては当たり外れが大きい選抜ということになるかと思います。



右上の共通テストを課す総合型や学校推薦型ですと、これまでの 2 つの方式の課題を克服できて、恐らく大学としては理想的な選抜になると思います。

学力高　×　キャリア教育　深型
「共通テストありの総合型・学校推薦型選抜」
「志願書付一般選抜」

課題
△共通テスト直前に出願の場合
　⇒　生徒も教員も共通テストに集中できない。出願時期に配慮。
△共テ有推薦増
　⇒　対話で思考を深める時間が取れない
　⇒　志願書の質は低下する（⇒早めの準備の方向になるだろうな）
　⇒　ほとんど共テで決まる　or　書類指導塾の台頭
　⇒　「一般」と変わらなくなる？

だからといって共通テスト直前に出願書類の提出締切や受験日を設定するということは、生徒も教員も共通テストに集中できないような状況が生まれてしまいます。

また、ほとんどがこの選抜方式になってしまうと、対話で思考を深める時間というのがなかなか取れなくなるので、これまでのような志望、志願理由書レベルまで育てることができないとも思います。もちろん生徒が自分で書いたもので教員の指導は不要ということもよく言われますが、生徒としては不安なので「見てください」というふうに持ってきますし、持って来られれば、「てにをは」レベルでは終わらず、対話を繰り返して育てることになっていきます。それまでのキャリア教育や探究活動で育てておくということなのでしょうが、たとえ育てていても文書に書くという段階での指導は多かれ少なかれ必要かと思います。ですので、先ほどの長崎大学の先生もおっしゃっていましたが、進路多様校から出願していくのが少し難しくなっていくかもしれないというように思われます。

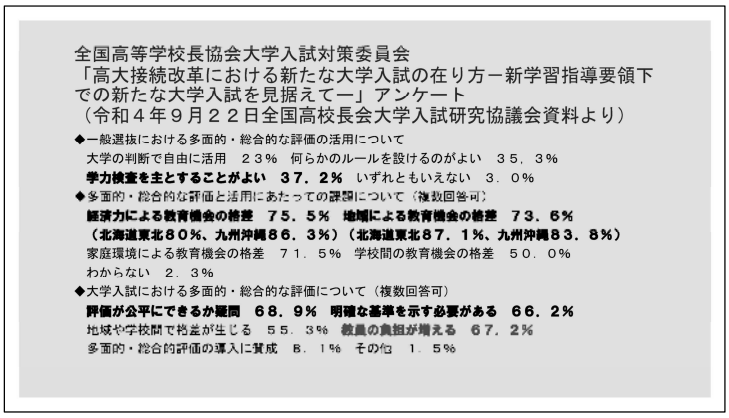
全国高等学校長協会大学入試対策委員会
「高大接続改革における新たな大学入試の在り方ー新学習指導要領下での新たな大学入試を見据えてー」アンケート
（令和４年９月２２日全国高校長会大学入試研究協議会資料より）

◆総合型選抜において、各大学が実施する評価方法等又は大学入学共通テストの活用を必須化されたことについて」
　評価できる　６３．２％　評価できない　１１．５％　どちらともいえない　２５．３％

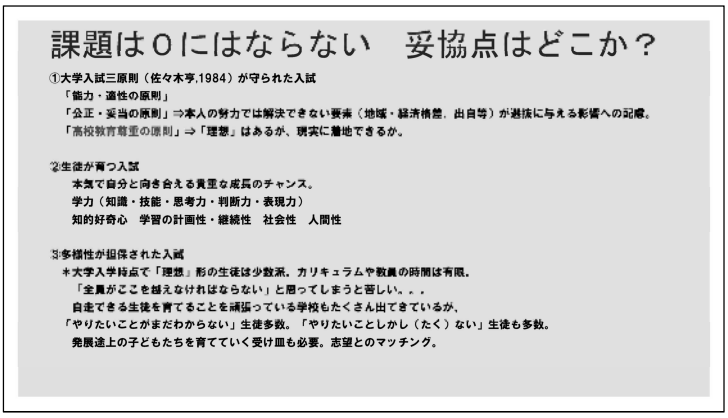
◆選抜方法の多様化に対する高校側の指導体制の整備について
　現行の教育課程で対応できる　２５．１％　**十分な指導ができていない　６８．３％**
　高校で指導していない　０．２％　いずれともいえない　６．４％

こちらは先々月の全国高等学校校長協会の大学入試研究協議会で共有された資料になっています。「総合型選抜において各大学が実施する評価方法等または大学入試共通テストの活用を必須化されたことについてどう考えますか」という問いに対しては、「評価できる」と答えられている校長先生方が多いということなのですが、それと同時に多様化に対する指導体制については「十分じゃない」と答えている高校が約７割です。７月段階のアンケートと伺っていますが、やはり「しっかり指導したい」という気持ちも含めて、現場の状況を

よく表しているデータなのかなと思ったのでご紹介しました。



こちらも同じアンケートの抜粋ですが、一般選抜における多面的・総合的評価については、「公平性に課題がある」との指摘と、「教員の負担増」についての指摘がなされています。



どのような入試も結局課題はゼロにはならないのではないかというふうに思います。大学も高校も妥協できる点はどこかということを考えていく必要があるかと思っています。第 1 に、大学入試三原則が守られた入試であることというのが一つの大事な条件だと思っています。最近はこの原則が脅かされるような、2 年前予告がなされなかった例もありましたし、さまざまな事情は大学側にもあると思うのですが、それでなくても高校教育は変更がずっと続いていますし、コロナ禍でなかなか対応が大変だということもありますので、落ち着いて授業ができる環境を維持したいという思いがものすごく強くあります。理想はあっても現実に着地できるかというようなこともあると思うので、対話を続けていくしかないと感じています。

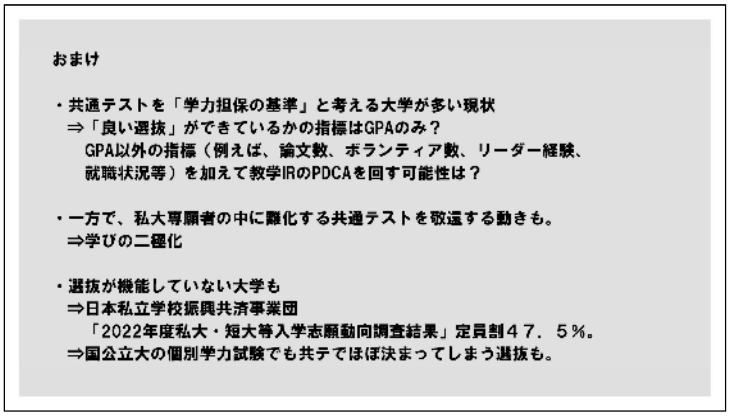
第 2 に、生徒が育つ入試であることです。今の日本で子どもたちが本気で自分と向き合って成長できる最大のチャンスの一つが入試かもしれません。そのチャンスを生かして一回り大きくなって卒業していく生徒たちを見たいなと思っています。

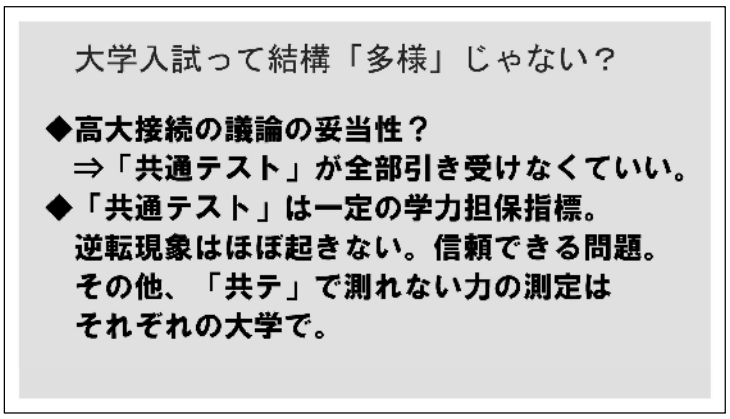
第 3 に、多様性を担保して、学力面もキャリア面も探究もというふうに、全てに頑張って

力を付けることが理想ではありますが、時間はやはり有限です。子どもたちの自走性を育てようとする学校も増えてはいるのですが、まだまだやりたいことが見えてないという子も、やりたいことはあるがそのことをやるためにやりたくないこととも向き合っていくというような力が育ってないという子もいます。本来、大学は研究機関なので、そのレベルは超えてきてほしいという声も理解できるのですが、それこそ 1990 年代に 25%くらいだった大学進学率も現在では 50%を超えていて、それでも世界の先進国の中での日本の大学進学率は低いという状況があります。

これからの学び続ける人を育てる国になっていくということを想定すると、人はいつ伸びるか分からないので、子どもたちの可能性を信じて育てていくというような受け皿も必要な気がしています。多様校の生徒たちが幸せに志望とマッチングして大学進学できるような入試というのを維持していけたらいいなと思っているところです。

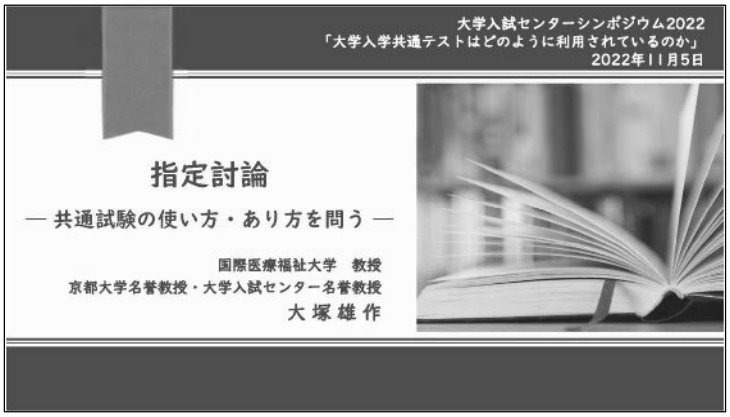
2 枚、残ってしまいましたが、時間ですので以上にしたいと思います。ありがとうございました。

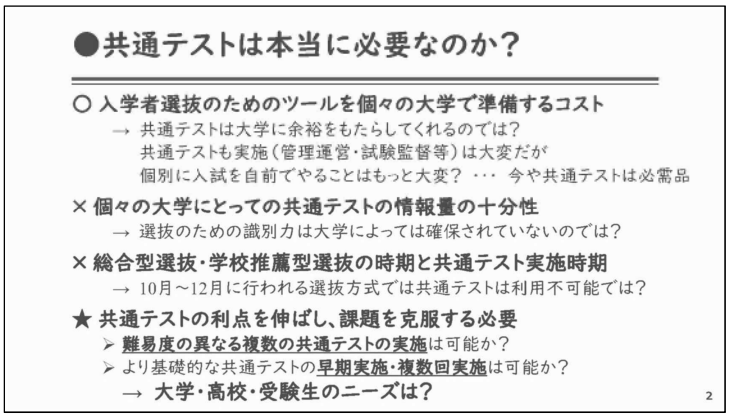




■ 指定討論

大塚 雄作（国際医療福祉大学赤坂心理・医療福祉マネジメント学部教授）





【大塚】　それでは、「共通試験の使い方・あり方を問う」という視点からコメントいたします。

まず、センター試験から共通テストという改革が行われて 3 年目を迎えようとしているわけですが、各大学にとって本当に「共通テスト」が必要なのかという疑問を投げかけてみたいと思います。結論から先に言ってしまいますと、これは私にとっては反語的な表現でして、「大学入試センター試験」にせよ「大学入学共通テスト」にせよ、「共通テスト」という存在は、日本の教育の中でますます必要になっていくのではないかということを訴えるための表現であることをお断りしておきたいと思います。

吉村先生が少し触れてくださいましたが、入学者選抜のためのツールを各大学で準備するというのは本当に大変なことです。準備するのが大変なばかりでなく、結果的に入試ミスなどということが社会問題になったりもしています。「共通テスト」は、大学にかかるそういった負担が軽減されるという意味で、大学に余裕をもたらしてくれることになります。そ

の部分は日常の教育や研究のほうに振り分けられるということにもなると思います。「共通テスト」の実施に関しては当日の試験監督であったり、そこに向けての試験場の準備であったりと、各大学には多大なご負担をおかけすることになっていますが、入試をすべて自前でやるということになるともっと大変な部分が出てくることになる大学が多いと思いますので、今や「共通テスト」は大学にとっては必需品だろうと思うわけです。

本日お話を伺ったのは長崎大学と早稲田大学の 2 つの大学だけでありますが、センターの調査では、615 大学から回答が寄せられてきていまして、それぞれの大学の事情によって、「共通テスト」を利用したいという時に、いろいろなネックがあることが窺えます。

一つは、難易度のレベルの問題です。この点は沖先生から、私立大学全体を代表する形で触れてくださいました。個々の大学にとって、「共通テスト」というのは、例えば難し過ぎるということになると、選抜するための十分な情報量が得られないということもあるわけです。イギリスの GCE が AS レベルと A レベルという 2 つのレベルが担保されているということもご紹介いただきましたが、背景が違いますので、それをそのまま日本に当てはめるわけにもいかないと思いますが、いくつかの難易度レベルの「共通テスト」が用意されれば、大学にしても、また、受験生にとっても、両者にとってメリットのあることではないかと思います。そこを何とか切り開いていく方法がないのかというのが一つの課題になると思います。

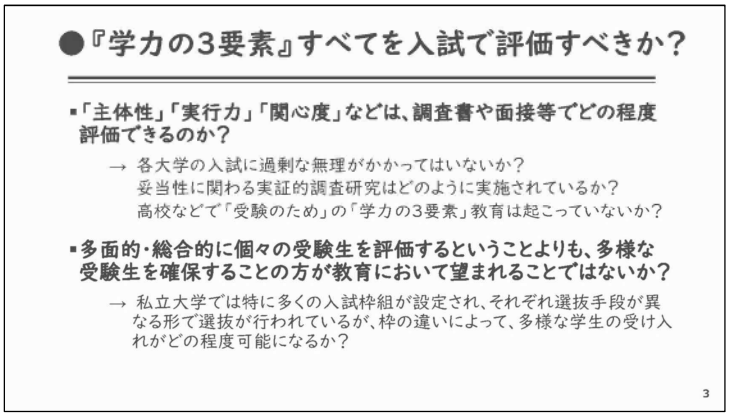
それからもう一つは、「共通テスト」の実施時期の課題です。これも沖先生が触れてくださいましたが、総合型選抜、学校推薦型選抜というのは 9 月から出願が始まって 12 月までというような形で、「共通テスト」の前に行われることが通常です。私も、国際医療福祉大学に所属して、先月は総合型選抜の面接員を担当しました。今月は、半ばに学校推薦型選抜の面接があります。そんな形で、総合型・学校推薦型の選抜は、今頃試験が行われているわけです。そのような日程の選抜方式では、「共通テスト」を利用したくても、私立大学の場合はそれまでに合否を決める必要があるので、日程的に利用不可能であるわけです。

ですから、「共通テスト」を利用できれば利用したいということはあったとしても、総合型・学校推薦型の選抜においても、今は「学力」面も評価することになっていますので、簡易な学力試験を用意したりして対応することになるわけですが、それは大学の負担にもなりかねません。その種の簡易な学力試験については、社会的に大きく取り上げられるということはあまりないのだろうと思いますので、必要以上に神経を尖らす必要もないのかもしれませんが、それが「共通テスト」が評価されているように信頼感のある試験になっているかどうかという意味では、かなり心もとない部分もあるだろうと思います。

そういう意味で、「共通テスト」の利点をうまく伸ばしてこれらの課題を克服するような方法はないのかということを、今後検討していく必要があるだろうと思います。これはそう簡単なことではありませんので、例えば、難易度の異なる複数の共通テストの実施ということは、どういう形で実現し得るのかということを一つの論点として、国立大学、私立大学、あるいは高校の側から、忌憚ない意見を出し合うと共に、理論的背景や実行可能性などの検

討も含めて、議論を深めていく必要があります。

また、「共通テスト」を総合型選抜・学校推薦型選抜で利用するためには、より早期に実施する必要がありますが、これは既に今回の入試改革の議論の中で、早期実施は高校の教育に影響を及ぼすということで避けざるを得なかったということもありました。複数回実施ということも、実施する側の負担も大きなものになります。理論的には、複数回実施に関してはIRTなどを利用して、項目バンクが整備されれば、実行は可能かと思います。それを総合型や学校推薦型選抜で最終的に一定レベル以上を合格とするといった資格試験的な形で利用する場合には広く利用されていくことになるだろうと思います。しかし、一般選抜において、競争試験の中で複数回受験ということになりますと、何回も受けないと他の人より上に行けないのではということにもなって、複数回全体が1回の単独試験と同じ形になって、受験生の負担をかえって大きく増すことにもなりかねないということもありますので、この辺もなかなか難しい問題が残っていると思います。

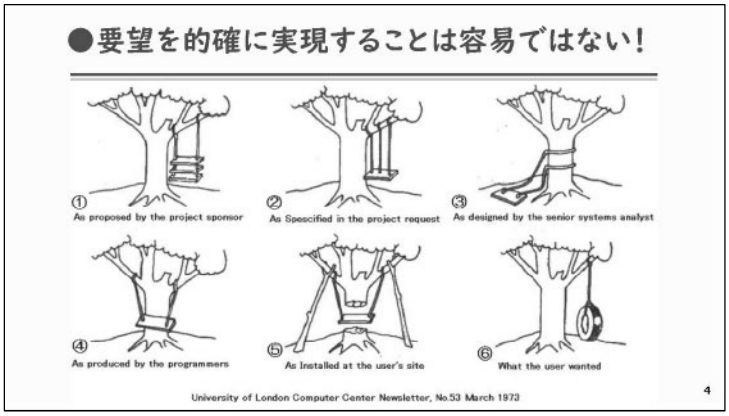


次に、これは「共通テスト」というよりも、各大学の個別の入試に関わることですが、長崎大学でも非常にご苦労して「学力の3要素」を、いろいろな入試の方法で評価されているということですが、「主体性」、「実行力」、「関心度」といった部分を、調査書や面接などの方法でどの程度的確に評価できるのかという問題があります。大学は、入試においてそういう工夫を講じなければならないということで、実のある結果が得られないまま、過剰な負担がかかってしまっているのではないかと危惧します。その点で、「主体性」というものを測る試験といいながら、それが本当に測れているのかどうかという、いわゆる「妥当性」に関わる実証的調査研究が各大学でうまく進められているのかも心配です。この課題は、大学にとって非常に大きな課題になっていくのではないかと思います。

また、高校では、入試において「主体性」や「実行力」などを、例えば調査書で見ると言われると、受験のための教育、例えば学級委員をやっていると主体性を評価されやすいというようなことが起こってくると、毎月学級委員を代えていくといったことが実際にすでに起こっているという話も聞きます。このように、高校教育に必ずしも望ましい波及効果がもたらされるとは言えない部分があることも把握しておく必要があると思います。

そういう意味で、総合的・多面的に個々の受験生を評価するというよりも、最後に沖先生が提案してくださった早稲田のポリシーで、多様な受験生を確保するために多様な受験方式を準備していくということのほうが、もっと考慮されてよいことではないかと思います。大学教育においても、それによって多様な学生が担保されれば、多様な学生の交流の中で何か新たなものが生み出されていくという、大学に求められる創造的な知的財産の創出ということも期待できるのではないかと思います。

すでに私立大学では、特に多くの入試枠が設定されて、それぞれ選抜手段の異なる方式で選抜が行われているわけですが、そういった枠の違いで多様な学生がどう受け入れられているのかという実証的な調査研究も積み重ねられるとよいと思います。入試枠組みを多様化していくということについて、これも大学側・高校側など、各方面からのニーズであるとか利点・欠点や課題などを吸い上げて、制度設計していかなければいけないと思います。この点についても、皆さんからご意見を頂ければありがたいと思います。



最後のスライドは、こんな試験にしてほしいという要望が出てきた時に、それに対してどう対応するかという点で、子どもたちから出された公園の木にブランコをつり下げてほしいという要望が、いろいろな立場の人が考えていく過程で要望と違ったものになっていってしまうという風刺画です。最後の単純なタイヤがぶら下がっている絵が、子どもたちが本当はこれでよかったということなのですが、要望を的確に実現していくということはそう簡単ではないことを表現してくれているので紹介してみた次第です。延沢先生もおっしゃっていたように、入試というのは一つの妥協の産物で、その妥協点をどこに求めるか、この辺りもこれから、大学、高校、各方面の意見を集約していく必要があると思います。私からは以上です。

■ 総合討論

■パネリスト ／ 五十音順

荒井 清佳（大学入試センター研究開発部准教授）

大塚 雄作（国際医療福祉大学赤坂心理・医療福祉マネジメント学部教授）

沖　清豪（早稲田大学文学学術院教授・文学研究科長）

椎名久美子（大学入試センター研究開発部教授）

延沢恵理子（山形県立東桜学館中学校・高等学校教諭）

吉村　宰（長崎大学教育開発推進機構アドミッションセンター教授）

■司　会 ／

石岡 恒憲（大学入試センター研究開発部長）

【石岡】　それでは、ただいまから総合討論、質疑応答に移らさせていただきます。総合討論の司会を務めさせていただきます、大学入試センター研究開発部長の石岡です。どうぞよろしくお願いいたします。

まず、ここから指定討論者である延沢先生、大塚先生からご提示いただいた論点を受けて、登壇者にご回答いただきたいと思います。その後、時間に余裕がありましたら、個別の登壇者への質問を頂いていますので、賛同の多い順に受けるという形で進めさせていただきます。

まずはお二人の先生方からご意見を頂いたわけですが、大塚先生から共通テストは本当に必要なのか、ツールを個々の大学で準備するのは非常にコストがかかりますし、椎名先生からも一般選抜、総合型、推薦型、どのタイプの試験においても共通テストは非常に役立っているというお話になっていたわけですが、これに対して、例えば高校の立場でもやはりそうなのかという辺りのところ、延沢先生からご意見頂けますでしょうか。

【延沢】　逆転現象が起きない入試になっていると思っていて、いわゆる、ちょっと言い方は悪いのですが、例えば努力をしていないのにラッキーで点が取れちゃったみたいなことが起きない入試になっていて、とても信頼のできる問題だというふうに個人的には感じています。共通テスト自体は本当に信頼のおける、一定の学力担保の指標として役立っているのではないかと感じています。先ほど残った 2 枚目に出そうと思っていたのですが、共通

テストは今全部引き受けるような形で頑張ってくださっている感じですが、「共通だ」というところの役割をしっかり果たされているというところに価値があるのかなというふうに思っているところです。

【石岡】　椎名先生、何か補足ですとかご意見、情報ございますか。

【椎名】　補足ということにはならないかもしれないのですが、先ほど延沢先生の指定討論の中で、共通テストありの総合型や学校推薦型選抜だと、結局一般選抜とあまり結果的に受かる人が変わらなくなってしまうのではないかというご指摘もありました。その点に関して、長崎大学の吉村先生から特別選抜で来る人たちが後期と変わらないのではないかということに関して意識調査をしてみたところ、やはり従来の後期とは違う人が入ってくることが示されたということがあるかと思います。これは私から長崎大学の吉村先生に伺いたいと思っていたことですが、いろいろな選抜で入ってきた人たちに関して、一つ意識調査のことを紹介されましたが、いろいろな人たちの違いに関して、大学のほうではどういうことをどれぐらい、追跡調査という言葉がいいかどうか分からないのですが、どういった検証をなさっているのかということについて、差し支えない範囲で教えていただければと思います。

【吉村】　これ、まだ今回のジャーナル[1]に投稿中のものなので、皆さんに共有できていなかったのですが、毎年入学手続き時に質問紙を配って意識調査をしています。その中の一つでこれらの 23 項目、得意か、どちらかといえば得意、どちらかといえば苦手、苦手、経験がない、あと無回答というふうに聞いています。それを過去 6 年。これはいわゆるコンピテンシーに相当するものだと思います。

前期と後期というのは割と似ている傾向があって、この辺りは全体です。先ほどの違いが見られるというのはこの 3 つです。これは一般選抜の前期で、これが課す特別選抜です。募集人員が結構増えて数があるので、それなりに安定した値だと思うのですが、特にこの「やり遂げる」という辺りはマーカーが少し大き過ぎて分かりづらいと思いますが、20 ポイントぐらい違いが出てきています。課すほう、つまり、単に共通テストを受けて一定の点数を取れたというだけではなくて、推薦なら推薦、総合なら総合という良い面がきちんと出てきている。そういう学生が入ってきているというふうな捉え方をしています。

だから、普通に後期は前期に似ています。後期がどんどんなくなって、こういった特別選抜の課すほう。そうすると第 1 志望落ちて、いわゆる滑り止めで長崎大学に来た、そういう学生よりももっと志望の動機が強い入りたいと思っている学生が入ってくる。その結果が

[1] 吉村宰（2023).「入学時意識調査にみられる基礎的・汎用的能力の特徴について－2017 年度～2022 年度入学者の入試区分による比較－」『大学入試研究ジャーナル』, 33.

このようなところに表れているというように考えています。

【石岡】　結局、多様な入試をすることによって多様な人材を採りたい。早稲田大学の沖先生からのお話でもそのような話があったわけですが、やはりたくさん多様な入試をすることによって、そういう多様な人材っていうものが実際採れているものなのでしょうか。その辺りの感想というか印象といいますか、実証的なデータがあればよりよろしいのですが。

【沖】　ご質問ありがとうございます。この点は、先ほど若干ネガティブな参照もされていましたが、なかなか簡単ではないといいますか、学生生活・学修行動調査で詳細に入試区分別で分析をするということは公表してません。ただ、内部で今まで GPA との関連で分析というのは 10 年ほど前から、具体的な数値は公表していませんが傾向については紹介してきました。それを申し上げると、やはり一般選抜で入学して来ている学生よりも、学校推薦型選抜で入学する学生のほうが成績が良いのです

GPA では本学の場合は指定校推薦、今の学校推薦型の集団が非常に高い数字を示す。大学入学後の学習と指定校推薦のほうが親和性が高いようなのです。それはなぜなのかというところが課題になっています。

ただ一方で、入学後の伸びに焦点を当てると、やはり一般選抜で入学してくると学年が上がると成績も上がってくるという傾向がある。逆に学校推薦型の入学生の成績はあまり変化がない。学年が上がったから何か伸びるというようなことがあまり明確には見えないという課題をずっと抱えています。

その上でさらに近年、総合型の入学者が増えてきたなかで、第 3 のグループとして特性をどのように見ていくかという点で、新しいグループがどうかを見ると、今のところ肯定的な評価を得ています。ただ、これは共通テストを使っているから伸びているとか変わっているかという話というよりは、新しい入学者選抜でどうなっているかという形で見ています。共通テストが効いているかどうかはまだ始めて 2 年なので、まさに効果がまだ分かっていないところだということを前提にご理解いただきたいのですが、その上で、昔の AO 入試の学生、今の総合型選抜の入学者は、実は全体を見ると得意不得意が結構はっきりある。

GPA は高いのですね。ただ、得意不得意が見えやすいタイプが入ってきていて、まさにこういうことをやりたいからこの大学、この学部へ来たというタイプ。しかもまだあまり枠が大きくないので、非常に選抜の倍率が高いものが多い。特に新思考入試は相変わらず何十倍という倍率になってしまって、入学者が増えないという、お互いにあまり望ましい関係ではないので、もうちょっと何とかしたいというのは個人的には思っているところです。ただ、入学してきた学生層が比較的われわれの狙いどおり、周りの学生に対する影響力みたいなもの、要するに、積極的にいろいろ行動してくれているということは、授業を担当していると分かるわけです。

しかし、数字でどのぐらい出ているかというと、どうしても GPA の話に戻ってしまいま

す。また、少人数であるということから、統計的に見ることも非常に難しいというところで、もうあと数年かけないと本当の成果が分からないというような状況が現在の本学の状況かと思います。今説明できる範囲ではこのような感じです。

【石岡】　やはり定量的にやろうと思ったら GPA ぐらいしかないということなのでしょうか。

【沖】　どうしてもそれ以外のデータをみんなが 100％回答してくれないと――アンケートですね。学生調査、それなりにやっているのですが、必ずしも回収率が高いわけではない。そうすると、小規模な入学者しかいない入試の枠は本当に個人の属性や傾向が直接反映してしまうので、データを果たしてどう読んだらいいのかという、分析の前の問題がどうしてもあって、ある程度データの蓄積を待っていかないといけない。あるいは、そもそも今の入試のごくわずか、入学者全体が 1 万人の中のせいぜい数十人、数百人というような制度の場合に、果たしてどのぐらいそこの結果を見てというふうになるか。基本的には成功しているというか満足度の高い、教職員側も学生側もそれなりに満足してくれている結果になっているかなというところまでで、どうしてもその先、数字で表すということはなかなか難しい。結局 GPA が一番シンプルですぐ分かるということが、今まさにご指摘にあったような課題として、われわれとしても共有しているかなと思いました。

【石岡】　長崎大学でもいろいろな入試をやって、多様な人材ということを意図して採られていると思うのですが、東大の佐藤仁先生が書かれた、プリンストンと東大で両方教えてみたけれど、東大のほうは一発でやるが非常に多様な人がやってくる。プリンストンのほうは、人種は多様だがみんな似たようなタイプの人がやってくるみたいなことが書いてあるわけですが、実際多様な入試をして、多様な人材が採れているのかどうかといった点について、長崎大学ではどのような感じなのかお話をお聞かせいただければと思うのですが。

【吉村】　大学の見解ではなくて、私自身の考えとして、多様になっているとは考えていません。むしろ、共通テストを課すことによって、傾向としては前期・後期に近づいています。ただ、そこに出願してくるということで、延沢先生が書かれた 2 次元に分けた表ありますよね。あの資料で独立の軸として書かれているあれをもっと斜めに書くと分かりやすいのですが、「共通テストプラス総合・推薦」は学力が高くてキャリア、自己探究、その辺ができているというイメージで捉えていただければ分かりやすいかと思います。どちらかというと普通科の高校に対して学力なしでオーケーというようなものを閉ざしていっている。そういう意味で、多様ではなくなってきているというふうにお考えください。その結果、意外と入ってくると学力が担保されつつ違ったタイプの学生が入学してきているという感じです。

【石岡】　大塚先生から主体性、実行力、関心度などは調査書や面接等でどの程度評価できるのかというご質問というかテーゼが与えられているのですが、それに関してはどのようにお考えでしょうか。

【吉村】　これは難しいところですが、調査書は公正性の担保のところで少し触れましたが、そういう書類もの、あるいは調査書の裏に書いてあるいろいろな資格等々は比較ができないので、公平・公正性が担保できない。結局、成績ですよね。学内でいろいろと調べてみると、高校のいわゆる偏差値的な違い、これが多少違っても、高校で成績がいい場合は真面目に学ぶ態度があることの指標として使えるということがデータとして分かっています。それは A の段階だけです。B になると高校のいわゆる偏差値的なランクが影響してきます。多分学力が違ってくるのだと思います。

面接等については、これも一番最初に少し触れましたが、国立六大学の連携入試事業の中で、面接及び紙による面接に代わる筆記試験を高校で試行しまして、その採点結果を生徒のことをよく知る高校の先生に見ていただきました。そうすると、まあまあいいんじゃないというようなことを言っていただいたので、そういった意味での妥当性というものはあるのではないかというふうに考えています。

【石岡】　延沢先生、それに対して何か反論、ご意見ございますか。

【延沢】　最近の高校の現場において、総合型選抜や学校推薦型の選抜の拡大ということを、それこそ学力不問で伸びているようなイメージを持っている方々もいると感じることがあって、やはり大学に行くということは「学問をやりに行くということなんだよ」というところが、今まで結構甘いまま進んでいたところが私たちの中にあったんじゃないかなと感じています。

多くの国公立大学や難関の私立大学では、必ず学力を問うてくる入試になっていっているということに対して、「なかなか受からなくなってきたね」っていう現場の実感が正直皆さんの中にあるんじゃないかなと感じています。そのことはこれまで学力をあまり見ないで他の力を重視してきてしまった、ちょっと言い方は悪いのですが、そういう入試もあったということで、それを是正していくという形で長崎大学のようにどんどんバランス型の学力のない子たちの道を閉ざしているというか、そういう方向性があるということを、私たち自身もここ数年ですごく感じているという状況です。

【石岡】　そういうことであるならば、例えば今共通テストは 1 種類しかないわけですが、沖先生が言われたように、要するに 2 段階の試験といいますか、今の問題ともう少し易しい問題というふうなタイプの問題があると、実質的な問題もあるのかもしれませんが、高校

サイドとしては嬉しいものなのでしょうか。

【延沢】　物差しが複数あると大変だろうなと思います。それにやはり高校のスケジュールの中に入ってくるということが難しいんじゃないかなと思うんです。今の共通テストはレベルがアップしているので、実際に私大志願者の中に難化してくる共通テストを敬遠するというような動きも出ているという話も某予備校さんの分析でも言われています。難しいなと思ったことを避けるような子たちは受験の土俵に上がれないようになっていくんだろうと感じています。

【石岡】　個別の大学では難しい試験と易しい試験を使ったとしても、どちらか一方しか使わないということだとは思うのですが、大学によっては中で複数の問題を使うということはやはり実際は難しいのでしょうね。どうなんでしょう。早稲田大学さんとか。

【沖】　現状においてはあまり、少なくとも本学において分ける理由がないというのが先にあるので想定していないわけです。一方で、私立大学、非常に多様ですし、ご承知の方は当たり前だと思われるかもしれませんが、共通テストの利用の仕方自体が 2 回ないし 3 回、入学者選抜や合否判定を 1 月、2 月、3 月それぞれに行うというような私立大学も一方にあります。しかもその際には、最初のうちは少数科目で合否を決めて、3 月になってから多少多めの科目で合否判定するというような、共通テストの使い方自体が非常にバリエーションに富むということで、難易度といいますか、学生の合格者の決め方を変えてきているというような対応が現実には今起こっているので、それで良いと社会的に合意されてしまっていれば変わらないわけですよね。

　ただ、果たしてそれで先ほどから出ている私立大学全体が今後もそのまま対応できるか。一方で基礎学力の担保はどこかで誰かがやらないといけないはずなのですが、今の高校卒業の仕組みから考えると、ほとんどその問題は不問にされてきた。本日は入学者選抜の話、共通テストの話ですから、あまりここに焦点を当てるのはおかしいとは思うのですが、しかしそこをまず考えた上で、この選抜制度をどうしましょうかということを考えないといけないと私自身は思っているところがあります。そういう背景があるということでご理解いただければと思います。

【石岡】　この件について、大塚先生も先ほどおっしゃられたので、何か言いたいことがあるのではないかと思いますが。

【大塚】　なかなか難しい問題、矛盾する問題を抱えているので、これは実際に今般の高大接続改革の中でも議論されてきたことで、解が得られてない問題ですよね。でも、やはり高校生から見て、延沢先生がおっしゃっていた共通テストを課す大学を敬遠する高校生が多

くなってしまうということは、共通テストのレベルがそういうレベルにあるということなんだろうと思うのです。だから、上位という言葉がいいかどうかは微妙ですが、今のレベルでいい大学もあるわけです。しかし、いわゆるボリュームゾーンの受験生にとっては、「共通テスト」のレベルが多少なりとも高く、「共通テスト」で合格できるラインを超えるための勉強をするということに対して、自分だったらできるという「自己効力感」が得られにくいレベルになってしまっているのではないかというのが私の印象です。

これからの時代、これだけ受験生の層の幅が広がった以上、もう少し基礎学力をきちんと測定できる「共通テスト」のバージョンを用意していくということが、大きな社会的課題になっていくのではないかと思います。

ただ、複数のバージョンができたとして、それをすべて受けないといけないとか、何度も試験を実施するということも大変なことです。私のアイデアは、とりあえず難易度については二つのレベルにするくらいが現実的で、その両方を同日に実施して、部分的に共通問題をある程度含めておいて、これは石岡先生の研究開発部の腕の見せどころなのですが、得点の等化を行って、一方の試験だけ受験することで他方の試験の得点も提供できるようにしてはどうかということです。社会的に、そういう等化された得点で、入試における重要な選抜を行うということが納得されないと実行には移せませんので、今すぐできることではないと思いますが。

それと、易しいほうから難しいほうへの等化は、天井効果が生じてしまうと思いますので、理論的にも難しいと思うので、難しいほうから易しいほうへの等化を利用できるような方式を探っていくことになるかと思います。易しいほうのレベルは、競争試験というよりも資格試験的に利用する場合も少なくないと思いますので、等化得点で何点以上だったら合格というような使い方をする範囲では社会的な合意も得られやすいのではないかと思います。易しいレベルの試験であれば、ボリュームゾーンの高校生も、そのレベルだったら勉強すれば何とかなるという自己効力感が持てて、学習時間も自ずと増えてくれるのではないかと思ったりしています。そんな仕組みをつくっていく必要性が、これからの時代には大きくなっていくのではないかというのが、私が「共通テスト」に関わってずっと持ち続けてきている感触です。

【石岡】　そういうモチベーションというか動機付け、頑張れば何とかなるということを、期待を持たせるというのは大事なことだと私も思います。

ここで会場のほうから出てきた質問につきまして、登壇者の方にお答えいただければと思います。長崎大学の吉村先生への質問が 3 件来ています。1 つ目は、総合型選抜を、Ⅰは職業科に限定、Ⅱは普通科に限定したことによるメリット・デメリットがありましたかというご質問です。

【吉村】　1 つ目です。ちょっとニュアンスが違うのですが、学力検査を経ずに入学できる

という道を普通科の生徒に閉ざしたということです。高校は幾つかのタイプがあって、学力検査を経ずに入れる道を見つけると、それに特化した訓練をして、入れてくるという高校があるのですね。で、入ってきたが、高校で勉強をしっかりしていないものですから、やはり入学してから非常に困るということが起こります。もともとテストから逃げてきた、勉強するのが嫌だったという子が推薦で入ってしまう、総合型で入ってしまうということが起こるのですね。長崎に来てもう 15 年以上たちますが、昔はそうではなかったのです。そういう組織的なというか、ことはなくて、ここ 10 年になるか、ならないかなぐらいで学校ぐるみでそういうことをしてくるようになってきたという傾向が見られます。

高校の先生に聞きますと、高校も生徒集めが大変なんだと。とにかく実績を出さないと高校に生徒が来ない。そういうことも背景にあって、結局子どもが減った。高校は生徒を集めないといけない。そのためには、大学の進学実績を上げないといけない。そのことによって、どうやったら大学に入れるかということを一生懸命探すわけですよね。長崎大学、この道行けるぞ、と来るわけです。そして、入ってくると今度は学力が足りずについていけない。

その結果、例えば休学あるいは中退という結果につながってしまう。一応補習はしますが、大学からすると補習というのはやはりかなりの負担になるわけです。高校でやるべきことを大学で補習するとなったら、大学は負担になるのです。

そういう意味で、メリットはそういった負担が減ったということです。デメリットは、私の立場ではないですが、各部局からすると志願倍率が減った。そのことによって、本部からプレッシャーがかかる。それが各部局のデメリットだと思います。だから、全然関係ないところ、もともと I を設けていない、課さない道が開いてなかったところは全然関係ないという感じです。

【石岡】　それは質問の 2 番のところにある足切りというか 1 次選抜の得点率の現在の設定にメリット・デメリットがありましたかということと通ずる話ですよね。基礎学力の。

【吉村】　そうですね。これがいわゆる基礎学力の担保です。

【石岡】　質問の 3 番です。基礎学力を担保することへの共通テストの活用で、早期に合否が決まらないことに高校も大学もメリットを感じていることはとても理解できますが、年内入試での合格者が増える昨今において、志願者の低下、倍率の低下につながるリスクを回避するために大学として独自の活動をされているのであればぜひ教えてくださいというご質問です。

【吉村】　リスクを回避というか、実際に志願者数が低下して倍率も低下しているのですが、各部局がそれをどう捉えるかですね。やはり入学してから、例えば教育学部だと教員採用試験を受験して合格してくれないと、教育学部としては評価が下がるわけです。ところが、基

礎学力を担保できていない、ちゃんと勉強してきてないで入ってきた学生は、勉強しない、合格できないというようなことが、結果として生まれるわけです。そうすると、多少やはり志願倍率が下がって、プレッシャーがあっても結果を取ると。教員採用という面での結果を優先する、そういうことがあります。

かなり頑張って推薦の、今回、課す推薦の人数、ほんとに倍率が低かったのですが、少し増やしました。それはそちらのほうの学生がより教員に向けて好ましい学生であったということだったというように考えています。

リスク回避するために独自の活動は特に、何もしてないわけじゃないのですが、いかに大学のいいところ、教育、カリキュラムの特色なんかを伝えていくかというようなところしかないかと思います。

【石岡】　会場からもう１件質問が来ています。大学卒業後の話ですが、大学卒業後について、今後の大学卒業生は今までの卒業生と違ってどのような変化を期待できるのでしょうというお話なのです。どなたに振っていいのか少し難しいのですが、大学関係者の方が適当でしょうか。沖先生や吉村先生からもしご回答があるのであれば、お答えいただければと思います。

【沖】　では、私のほうから簡単に。分かりませんというのが一つ。もう一つ、今回は共通テストの話に焦点化されていますが、やはり出口の問題は、大学としては入学後にどういう形で学生を育てていくかというカリキュラム・ポリシーですとかディプロマ・ポリシーとの関連で考えたいことです。ですので、それに合った学生を確保し、入学してもらうというアドミッション・ポリシーの点では、本日の議論としては、まさにそれぞれの大学でこういうふうに思っている――うちの場合は特に学部間で相当違うということもあるわけですが、その後の入学後の指導の中でぜひ変わっていっていただきたいなと思っていますし、それが最終的には各大学、本学も含めたディプロマ・ポリシーなどでこのような学生にこのような力がついているはずですよと。本来、それを証明できるように育てていますというようなこととして見ていただくといいのかなと思いますので、短期というよりは中期の問題としてぜひ大学側も高校側も共通の課題として受け止めていただけると良いかなと思いました。

【石岡】　吉村先生は何かございますか。少し難しいですよね。入試の話に特化している話なのに。

【吉村】　全く同じです。大学としても延沢先生のおまけのスライド、資料にあるのですが、実は入学時の意識調査というのは、PDCA のサイクルの起点となっています。GPA というのはまた簡単に数値化できるものとして使うことは使うのですが、学生の意識調査などの中でどういった力がついていっているかというのをチェックしていっているという側面が、

どちらかというとカリキュラムを回していく上でのチェックになってくるかと思います。一応ディプロマ・ポリシーもちゃんとありますので、3 つを一体的に 1 年かけて策定しましたので、そのディプロマ・ポリシーに応じた学生がちゃんと育成できたかどうかということを、そこまでとなると本当に研究室単位の教員が判断するというところしかないのですが、そこはまだ十分にデータは取れてないところです。だから、その先どうなるか、一応卒業生の調査というのも実施しているのですが、まだこうですとまとめるまでには至ってないです。

【石岡】　もうそろそろ時間になりつつありますが、多様な学生を求めるために多様な入試を行っているわけですが、そのために、そうであっても最低限の学力担保ですとかそういうのは必要だよというふうなお話だったのかなと思います。そのためにセンターも大学も不断の努力を継続していくということが大切だということだろうと思います。もちろんその背景には少子化で選抜からマッチングへといったようなところも、そういうことの背景にあるのかなというふうに理解しています。どうもありがとうございます。

つたないですが、以上で総合討論を終わりたいと思います。ご登壇の先生方、どうもありがとうございました。

【伊藤】　皆さま、どうもありがとうございました。

それでは最後に、当センター試験・研究統括官の山地より閉会のあいさつを申し上げます。

【山地】　大学入試センターで試験・研究統括官をしております山地と申します。今回のシンポジウムの閉会に当たりまして、一言ごあいさつを申し上げます。

まずは皆さま、土曜日にもかかわらずご参加いただきまして、本当にありがとうございました。それから、今回の議論を非常に有意義なものとしていただきました、登壇された先生方に、心より御礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

今回のシンポジウムは、大学入学共通テストがどういうふうに使われているのかという問いを軸に、いろいろな観点からのお話を頂きましたが、参加された方々には、ぜひ高大接続において共通テストというものをどういうふうに使えばよいのかということについて、何らか先に進むためのヒントになったようであれば大変幸いです。

私としては、大学入試センターの人間として、今日いろいろと反省するところがありました。特に吉村先生、あるいは沖先生のほうからありましたように、やはり一つの基準点を決めておられることがありますよね、得点率 7 割とか、あるいは 8 割とか。

この辺りが、今年の 1 月の「数学ＩA」のこともありましたが、なかなか教科間、科目間、あるいは年度間で難易度をきちんとコントロールするというのが難しい状況です。ただ、大学のほうではそういう使い方をなさっているということを改めて確認させていただいて、私どもの責任は非常に大きいと改めて感じた次第です。

また、共通テストが合否判定には使われずに、大学に入ってからの学習に向けて一種の教育利用がなされていることもあると伺って、共通テストが選抜だけのものではなくて、やはり到達度テスト的な役割も期待されているということを改めて知った次第です。

いずれにしましても、非常に長時間のシンポジウムでありましたが、皆さまにとって有益な機会になりましたことを心からお祈りする次第です。

この後、事務局から説明がありますが、シンポジウム終了後に情報交流セッションと名付けまして、Zoom ミーティングを利用した情報交流の場を設けさせていただきましたので、ぜひご参加いただければと思います。こういったオンラインですと、やはり登壇者と参加者、あるいは参加者同士のやりとりが非常にやりにくいところがありますので、昨年と同様にそういう場を設けさせていただきました。

あわせて、今回のアンケートを用意させていただいておりますので、皆さま方から率直なご意見、忌憚（きたん）のないところをお聞かせいただけると大変に幸いです。

最後になりますが、改めてご登壇いただきました先生方、それから、ご参加いただきました皆さまに心より感謝を申し上げまして、閉会の言葉とさせていただきます。どうもありがとうございました。

【伊藤】　ただいまをもちまして、大学入試センター・シンポジウム 2022 を閉会いたします。本日は多数の方にご参加いただき誠にありがとうございました。

大学入試センター・シンポジウム 2022

大学入学共通テストは どのように利用されているのか

令和３年度大学入学者選抜から，大学入学共通テスト（以降「共通テスト」と略）が実施されるようになりました。共通テストは 800 を超える大学・短期大学の入学者選抜で利用されていますが，共通テストを入学者選抜に利用するメリットや試験問題の難易度等の捉え方は，大学によって様々です。また，一般選抜のみでなく，総合型選抜や学校推薦型選抜で共通テストを活用する大学もあります。本シンポジウムでは，共通テストの様々な捉え方をアンケート調査に基づいて示すとともに，アドミッションポリシーを踏まえた共通テストの利用について２つの大学の事例を紹介します。共通テストに関する各大学の考え方に着目することで，高大接続において共通テストをより良く活用するための議論に繋げることを目指します。

2022. 11.5［土］
13:30～16:30

Zoom ウェビナー配信

13:30-13:35	開催挨拶	**山口宏樹** (大学入試センター理事長)
13:35-13:55	趣旨説明	**荒井清佳** (大学入試センター研究開発部准教授) **「シンポジウムの趣旨と大学入学共通テストの概要」**
13:55-14:35	研究報告	**椎名久美子** (大学入試センター研究開発部教授) **「令和３年度入学者選抜における共通テストの利用実態」**
14:35-14:50	事例紹介１	**吉村宰** (長崎大学教育開発推進機構アドミッションセンター教授) **「長崎大学の共通テスト利用」**
14:50-15:05	事例紹介２	**沖清豪** (早稲田大学文学学術院教授・文学研究科長) **「早稲田大学の入学者選抜制度改革における共通テストの位置付け」**
15:15-15:25	指定討論	**延沢恵理子** (山形県立東桜学館中学校・高等学校教諭)
15:25-15:35	指定討論	**大塚雄作** (国際医療福祉大学赤坂心理・医療福祉マネジメント学部教授)
15:35-16:25	総合討論	**荒井清佳・大塚雄作・沖清豪・椎名久美子・延沢恵理子・吉村宰** (五十音順) **司会／石岡恒憲** (大学入試センター研究開発部長)
16:25-16:30	閉会挨拶	**山地弘起** (大学入試センター試験・研究統括官)

総合司会／伊藤圭 (大学入試センター研究開発部准教授)

参加申込

11 月 1 日（火）までに，当センターのホームページよりお申し込みください。

・参加費無料，定員 800 名
・定員となり次第，受付終了とさせていただきます

主催 独立行政法人 **大学入試センター**

お問合せ先：試験企画部試験企画課
sympo2022@cen.dnc.ac.jp

■ 大学入試センター・シンポジウム２０２２　実施結果の概要

１．実施概要

日　　時：　令和４年１１月５日（土）　１３：３０～１６：３０
主　　催：　独立行政法人大学入試センター
参 加 費：　無料
開催形式：　Zoom によるオンライン開催
参加申込者数：　３９７人　　（前年度：２１２人）
　　参加者数：　２６４人　　（前年度：１３６人）　※センター関係者を除く
　　参加率：　６６．５％　（前年度：６４．２％）

２．参加申込者の内訳

（単位：人）

		教員・研究者	事務職員・会社員	その他（注2）	計	(参考：昨年度)
大　学		104	138	10	252 (63.5%)	135 (63.7%)
	国立	43	26	7	76	50
	公立	33	25	1	59	25
	私立	28	87	2	117	60
高等学校, 教育委員会		68	3	3	74 (18.6%)	40 (18.9%)
教育産業		5	36	7	48 (12.1%)	26 (12.3%)
その他（注1）		7	12	4	23 (5.8%)	11 (5.2%)
計		184 (46.3%)	189 (47.6%)	24 (6.0%)	**397** (100.0%)	212 (100.0%)
(参考：昨年度)		107 (50.5%)	101 (47.6%)	4 (1.9%)	212 (100.0%)	

（注1）　報道，大学団体，公的機関，個人等
（注2）　学生，経営者等

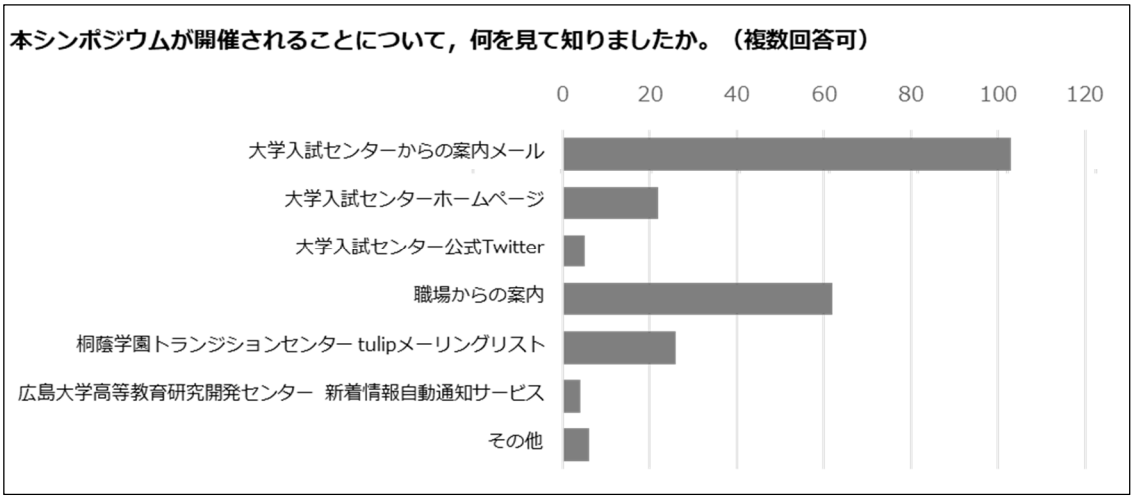
３．アンケート集計結果

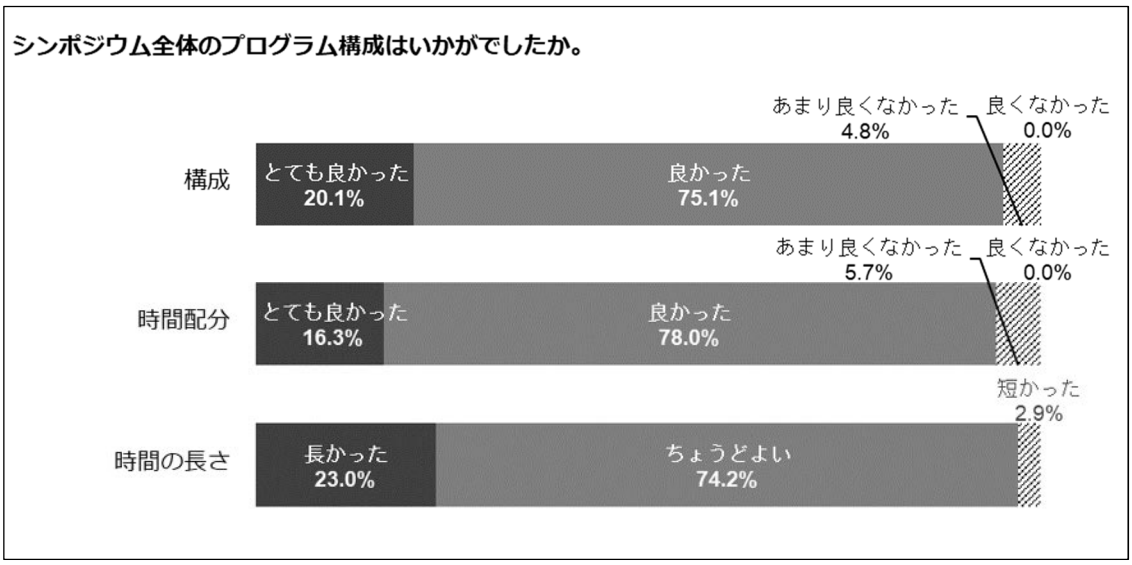
シンポジウム終了後に Web アンケートを実施した。集計結果の概要は以下のとおり。

⑴　アンケート回答者数：　２０９人　（※センター関係者を含む）

⑵　回答結果

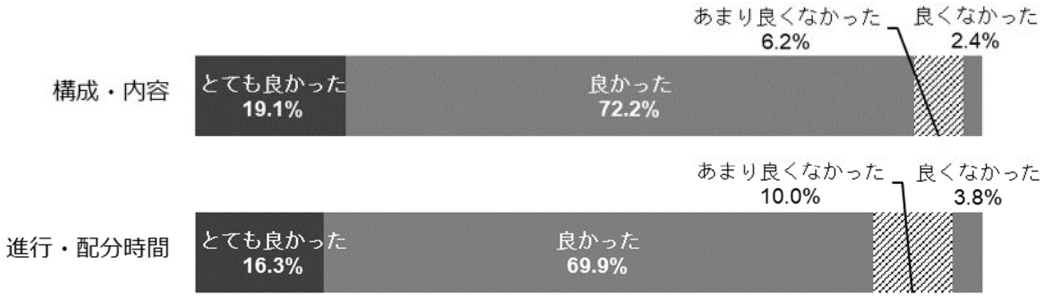
①　選択回答の結果



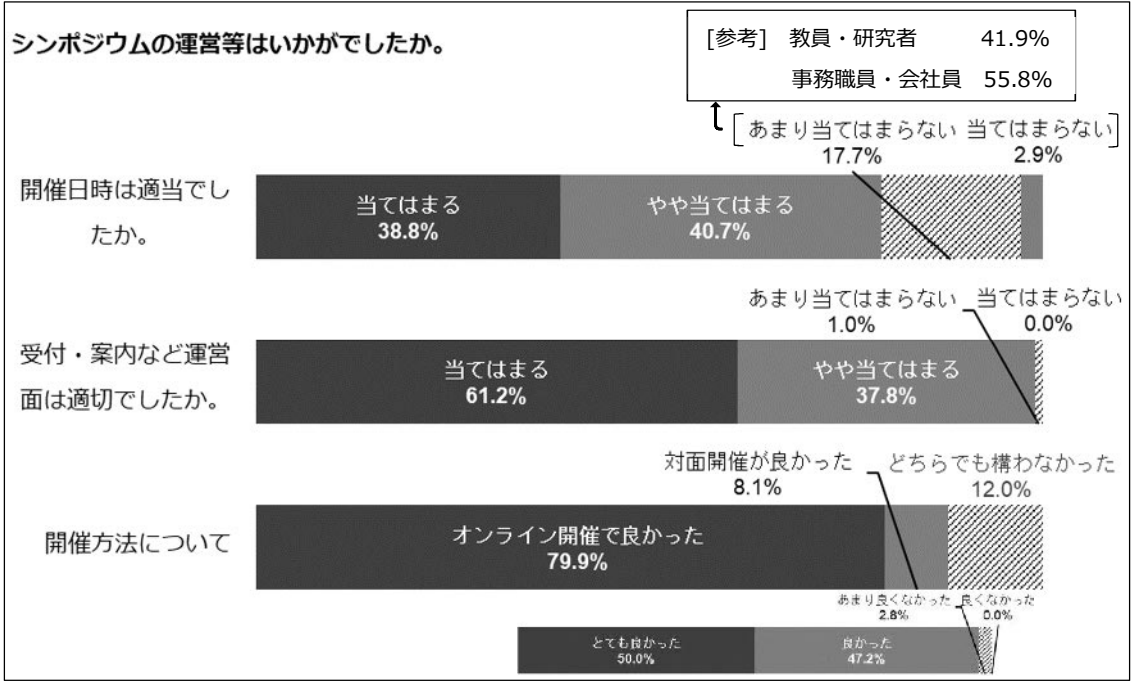


研究報告・事例紹介の構成・内容はいかがでしたか。

指定討論・総合討論の内容・進行等はいかがでしたか。



シンポジウムの運営等はいかがでしたか。



「情報交流セッション」に参加されたご感想をお聞かせください。（回答数：38）

令和 4 (2022)年度
大学入試センター研究開発部報告書
大学入試センター・シンポジウム **2022**

「大学入学共通テストは
どのように利用されているのか」

発行日 令和 5 (2023)年 3 月 31 日
編著者 試験企画部試験企画課
発行 独立行政法人大学入試センター
研究開発部
〒153-8501 東京都目黒区駒場 2-19-23
電話: 03-3468-3311 (代)
印刷 ヨシミ工産株式会社

独立行政法人大学入試センター
〒153-8501 東京都目黒区駒場2-19-23
https://www.dnc.ac.jp/ ☎03-3468-3311（代）